り」とよめるも、母屋の御簾に、葵のかゝりたるかれ葉をよめるよし、家の集にかけり。ふるき歌の詞書に、かれたるあふひにさしてつかはしけるとも侍り。枕ノ草紙にも、こしかたこひしき物、かれたる葵とかけるこそ、いみじくおつかしう思ひよりたれ。鴨ノ長明が、四季物語にも、玉だれに、後のあふひはとまりけりとぞかける。おのれとかるゝだにこそあるを、名殘おく、いかゞとりすつべき。

〔語解〕祭。加茂祭なり○後の葵云々。祭すぎたる後は葵とのけふくこと無用なりと也○色もなく。俗語のアイソウモナキといはんが如し○さるべきにや。さやうにあるべきことにやとの意也○周防内侍、周防守從四位上繼仲の女、後冷泉院の女房也。或は曰ふ棟仲の女、白河院の女房なりと○のくれども云々。このみすにのけし葵の枯葉も、われ思ふ人と、もろ共に見てころ甲斐あらめ。今はもろ共に見ねば甲斐なしとの意なり。葵に逢日とのね、のればは離ばと枯葉と兼用ひたるさま也○母屋。本屋とものけり。ふも屋といふ事にて、家のまん中といふ。母屋の御簾とは、廂と奥との隔てにのけたるなり○家の集。歌人のみづからの歌を集めたるといふ○枕ノ草紙。清少納言が作なり○こしのたこひしき物云々。こしのたは來し方にて既往なり。枕ノ草紙に、のれたる葵とのけるを、おつかしく思ひつきたるゆゑ、よき趣向とほめたる意也。○鴨

長明。鴨禰宜長繼の男、季繼の孫也。文段抄に、歌は俊惠法師の弟子なりしと、後鳥羽院和歌所の寄人とおさせ給へり。出家して法名蓮胤とて、外山といふ所にすみける云々、著書數種あり。と見も○四季物語。四卷あり○玉だれ。玉すだれ也○おのれとのるゝだに、葵の自然と枯るだにあはれなるに、まして跡のたもなく、いのゞ捨てらるべきとの意也。

御帳にかゝれるくす玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは、菊のをりまでも、あるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の内に、さうぶ、くす玉おどのかれたるが侍りけるを見て、をりおらぬねをおほぞかけつると、辨のめのとのいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江侍從がよみしぞかし。」

〔語解〕御帳。御とばりなり○くす玉。種々の香料と玉にして、種々の造花と結び付け、五彩の絲の八尺許なると垂れたるもの、簾或は柱おどに掛けて、不淨を拂ひ邪氣と避くといふ。端午には菖蒲を添へ、重陽には菊と添へて新と舊とと換ふるなり。又玉に五彩の絲のみ添へて身に繫くると掛香といふとぞ○枇杷皇太后宮。御名は妍子、御堂、關白道長公の女、萬壽四年九月に隱れさせ給へり。三條院の后にて、世に枇杷殿の皇太后宮といへるは是れなり○とりならぬねと云々。文段抄云、枇杷どのゝ皇太后宮煩ひ給ひける時、所とのへて心みんとて、外にわたり給

へりけると、かくれ給ひて後、陽明門院一品内親王と申ける、びわどのにのへり給へりけるに、ふるき御帳のうちに、あやめ、くす玉などの枯たるが、侍けると見てよみ侍ける、辨の乳母「あやめ草なみだの玉にぬきのへて折ふらぬねとなほぞのけつる。」返し、江の侍従「玉ぬきしあやめのくさは有りながらよどのはあれん物とやは見し」はじめの「あやめ草涙の玉にぬきのへて」は、藥玉とろへてなり。折ならぬとは、あやめのねに、なくねとろへて、九月なればとりふらぬねといふふり。返しのよどの。淀野は、あやめある所ふるに、夜殿と后宮の御寢所にのけてよめり○辨のめのと。前加賀守顯時の女、陽明門院の御乳母也○江の侍従。式部大輔大江匡衡の女、母は赤染衛門。

第百三十九段

家にありたき木は、松、さくら、松は五葉もよし。花はひとへ、ふるよし。八重櫻は、奈良の都にのみ有けるを、此のごろぞ、世におほくなり侍るふる。吉野の花、左近のさくら、みなひとへにてこそあれ。八重櫻は、ことやうの物なり。いとこちたく、ねぢけたり。うゑそとも有りなん。おそざくら、又、すさまじ。むしのつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅、ひとへなるが、とくさきたるも、かさなりたる紅梅のにほひめでたきも、みゐをかし。おそき梅はさくらにさきあひて、覺えたり、けおされて、枝にゐぼみつきたるてゝろうし。ひとへなるが、まづさきて散りたるは、心とくをかしとて、京極ノ入道中納言は、なほひとへ梅をなん、軒ちかくうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳、又をかし。卯月ばかりのわかゝへで、すべて萬の花紅葉にも、まさりてめでたきものなり。たちばな、桂、いづれも木は物ふり、大きなるよし。草は山吹、藤、杜若なでして、池には蓮、秋の草は荻、すゝき、きちかう、萩、女郎花、ふぢばかま、ゐをに、われもかう、かるかや、りんだう、菊、黄菊も、つたくぞ、朝顔、いづれもいとたかゝらぬぞ、さゞやかゐる垣に、ゐげからぬよし。此の外、世にまれなる物、からめきたる名の聞きにくく、花も見ゐれぬなど いとなつかしからぬ。おほかた、なにもめづらしく、有りがたきものは、よからぬ人のもて興ぜるものゐり。さやうの物ゐくてありなん。」

〔語解〕 五葉。五葉の松ゐり○花は 櫻とさす○八重櫻はゐらの云々。八重櫻は聖武ノ帝のとき、ゐらの都にうゑられしといふ。このならの都は、大和國添上郡に在りて、元明帝以下七代の舊都なり。詞花集に、一條院の御時、ならのやへざくらを人のたてまつり侍けるを、ふまへに侍りければ、其花と給りて、歌よめとおほせられければよめる、伊勢ノ大輔「いにしへのならの都の

やへざくらけふ九重に匂ひぬるかな」とあり○吉野の花。大和國の吉野山の産にて、花おほくむらがりて蕚より葉にかけて青し。山櫻の一種也○左近のさくら、紫宸殿ノ南庭の左右に左近の櫻、右近の橘の兩樹あり。こは仁明帝の御宇よりうゑられきといふ○ことやう　異樣なり○こちたく。心痛にて俗語のクド〳〵シイといはんが如し○ねぢけたり。枝などのまがりくねりて、すなはならぬといふ○むしのつきたる。毛蟲るをのつくといふ○むつかし。むさぐるしき意也○とくさきたる。初春に疾く開くといふ○ふるき樹はさくらにさきあひて云々。暮春のころ、さく梅は、丁度、櫻のさく時分なれば、人みな櫻のめづらしきと賞するゆゑに、梅は見劣るる也○けれされ　氣押さる也○京極入道中納言。正二位權中納言定家卿なり。貞永元年十一月に出家し、法名明靜といへり。仁治二年八月廿日薨ず。年八十三。京極と號す○ひとへ梅をゐん軒ちかく云々。風雅集ニ曰ク定家卿はやうすみける家に、まばし立入て程へ侍けるとり、このみづのらうゐて侍りける梅の樹の枝に、むすびつけゝる、永福門院ノ内侍「わすれじな宿はむかしに跡ふりてのはらぬ軒に匂ふ梅が え」返し前ノ大納言爲世「くちのこるふるきのきばの梅がえも又とはるべき春と待つらし。」○今も。兼好時代也○めでたき。愛すべき也○きちかう。桔梗あり○ふぢばかま。藤袴也。蘭の字ともかけり。二色あり○ゑとに。紫菀也○われもかう。木香なり。葉刈萱に似て穂あり○りんだう。龍膽也○さゝやかなる垣。小き垣なり○さやうの物なくてありゐん。唐めきたる名の、聞きにくゝして珍奇なる物は、よき上品の人にはゐくしてありたきと

の意なり。

第百四十段

身死して、財殘る事は、智者のせざる處なり。よからぬ物、たくはへ置きたるもつたなく、よき物は、心をとめけんと、はかなし。こちたくおほかる、まして口をし。我こそ得めなどいふ者どもありて、跡にあらそひたるさまあし。後はたれにと、心ざすものあらば、いけらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ。其外は、何も持たでぞあらまほしき。

〔語解〕身死して云々。前漢書曰韋賢及子玄成、俱以明經至相。諺曰遺子黃金滿籯不如敎子一經。後漢書曰龐德公居峴山之南、平生不入城府。劉表問曰先生不肯受官祿、何以遺子孫。曰世人遺之以危。我遺之以安。これ等の故事と引合せて思ふべし○よからぬ物云々。諺解に曰く、是等の物秘藏せしかと、持てる人の拙く思はるゝなり○我こそ得めなど云々。跡にのこる者どもの、おのれ取らんかぞゝいひて、互にあらそふありさま惡しきとなり○後はたれにと云々。死後には、誰々に讓らんと思ふ人あらば、生きゐる間にゆづり置くべしとなり。

第百四十一段

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦のおにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて、物がたりすとて、吾妻人てそ、いひつる事はたのまるれ。都の人は、てとうけのみよくて、實なしといひしを、聖、それはさてそおぼすらめども、おのれ

は、都に久しく住みて、なれて見侍るに、人の心おとれりとは、思ひ侍らぞ。なべて心やはらかに、情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけくいなびがたく、萬えいひはなたぞ、心よわくことうけしつ。僞せんとは思はねど、ともしくかおはぬ人のみあれば、おのづから、はいとはらぬ事おほかるべし。あづま人は、我かたおれぞ、げには心の色なく、情おくれ、ひと〳〵にすぐよかなるものなれば、はじめよりいおといひてやみぬ。にぎはひゆたかおれば、人にはたのまるゝぞかしと、ことわられ侍りしてそ、このひじり聲うちゆがみ、あら〳〵しくて、聖教のこまやかおることわり、いとわきまへぞもやと思ひしに、此の一言の後、心にくゝなりて、おほかる中に、寺をも住持せらるゝは、かくやはらぎたる所ありて、其の益もあるにこそと覺え侍し。」

〔語解〕悲田院。病者、孤子などの貧窮にして寄るべき縁おき者を養ふ所なり。ろの跡は今に鴨川の西畔に殘れりとかや○堯蓮上人。堯蓮のこと詳のおらず。上人とは僧の智德勝行あるものといふ○さうおき。左右おきにて無雙なり○吾妻人。關東の人といふ。こは日本武尊東征の歸途、東方とのぞみて橘姫と思ひ出でまし、吾嬬はやぞとのたまひしより、東とあづまといふ由、日本紀に見も○聖云々。ろれは左樣にころ思ひなさるゝなれとなり。聖は堯蓮とさす○けやけく云々。ハッキリと辭し難き義なり。いなびがたくはいやといひ難きといふ○ともしくおなはぬ。貧乏にして意の如くならざるおり○はいとはらぬ。本意の徹底せざるといふ○我おたなれぞ。堯蓮上人の故郷の方なれぞなり○心の色なく情おくれ。心の色なくはあいろうおきなり。情おくれはなさけも薄きとなり○ひとへにすぐよかおる。偏につよく眞正直ものなればとなり○ことわられ。事の道理と說明されしことなり○聲うちゆがみあら〳〵しくて。聲になまりありて詞つきのあらきおり○聖教。佛道の經論といふ○心にくゝなりて。奥ゆおしくおりており○おほる中に　僧侶の夥多おる中になり○住持云々。悲田院に住持せらるゝおり。

第百四十二段

心なしとみゆる者も、よき一言は、いふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、御子はおはすやとゝひしに、ひとりもゝち侍らぞと答しかば、さてはものゝあはれはおり給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんと、いとおそろし。子ゆゑにてそ、萬のあはれは、おもひしらるれといひたりし、さもありぬべき事おり。」

〔語解〕よき一言。野槌云、論語不以人廢言此の語より來れるならむ○かたへにあひて。傍輩に逢てなり○情なき御心云々。子おきものは物のあはれと知らざるべければ、定めて何事にも

無情なるべし。甚々ふろろしく思はるゝと、荒夷の詞なり。

恩愛の道ゐらでは、かゝるものゝ心に、慈悲ありなんや。孝養のこゝろなき者も、子もちてこそ、親の志は思ひ知るなれ。」

〔語解〕恩愛の道。子と思ふ道をいふ○慈悲ありゐんや。人とゐなしみ愛する心はあるまじとなり○子もちてこそ。子ともちてこそ始めて親の恩愛も知らるれとゐり。

世をすてたる人の、よろづにするすみなるが、なべてはたしおはかる人の、萬にへつらひ望みふかきを見て、無下におもひくたすは僻事なり。其の人の心になりて思へば、誠に悲しからん。おやのため、妻子のためには、恥をもわすれ、ぬすみもをつべき事なり。」

〔語解〕世をすてたる人。遁世者といふ○するすみ。匹如身の文字と訓む、沙石集に人の一物をも手にもたで行くゐのたちなり。下郎はするずみといふと見も。野槌ニ云〃匹は匹夫の義にて無一物の獨身ゐるといふ○はだし。妻子といふ○恥をもわすれ。父母妻子の爲に貧苦に迫れば、廉恥と忘れて、遂には盗ともなすやうにゐるとなり。

されば盗人をいましめ、ひがことをのみつゝみせんよりは、世の人の、飢ゑ寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人、恒の産なきときは、恒の心ゐし。人

きはまりてぬすみす。世、をさまらぎして、凍餒のくるしみあらば、とがの者絶べからぎ。人をくるしめ、法ををかさしめて、それをつみゐはん事、不便のわざなり。」さていかゞして、人を惠むべきとならば、上のおごりつひやす所をやめ、民をなで、農をすすめば、下に利あらん事、うたがひあるべからぎ。衣食尋常なるうへに、ひがことせん人をぞ、盗人とはいふべき。

〔語解〕人、恒の産ゐき云々。恒の産とは世わたるゐりはひといふ。孟子云若民則無恒産、因無恒心。苟無恒心。放辟邪侈無爲不已。兼好は、孟子の此語に由りてゐゝれたるにや○人きはまりてぬすみす。論語に、小人窮するときはこゝに濫す。孔子家語に人窮するときは則ち詐とあり○凍餒。凍はこゞゆ餒はうゝるなり○つみなはん。罪に行はむゐり○民となで。人民と撫育するといふ○農をすゝめ。農業と奬勵するといふ○衣食尋常ゐる。衣食も人なみに滿足するといふ。

（文格）人をくるしめ、法を犯さしめ」民をゐで、農と「すゝめ」は、例の對句法の精格なり。次の段の權化の人も云々、博學の士も云々」も同格なり。

第百四十三段

人の終焉のありさまの いみじかりし事など、人の語るを聞くに、たゞおづかにしてみだれぎといはゞ、心にくかるべきを、れろかなる人は、あやしくことなる相をかたりつけ、いひし言葉も、ふるまひも、おのれがこのむかたにはめなすて

そ、其の人の日來の本意にもあらぞやと覺ゆれ。此の大事は、權化の人もさだむべからぞ。博學の士もはかるべからぞ。おのれたがふ所なくば、人の見聞にはよるべからぞ。」

〔語解〕終焉。臨終のことなり○いみじこのり。よこのりし事○あやしくことなる相。奇怪にして、通常に異なれる瑞相とあり○ふるまひ。舉動あり○本意にもあらず。おのれが好める方に詞と作りてはめるすは、終焉の人の本意にもあるまじと覺もるなり○此の大事。臨終の時とさす○權化の人。衆生と濟はんが爲、權りに此世界に生れ出でたる佛菩薩といふ○博學の士云々。博聞多識の學者といふ。さて終焉のことは、其人の心中に在ることなれば、權化博士も豫じめ定の推量されざるとなり○おのれたがふ所なくば。おのれが本心に違ふ所なくば、人の見聞はいうにありともの丶はるなのれとなり。

第百四十四段

栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬あらふをのこ、あし〳〵といひければ、上人立ちとまりて、あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字〳〵と唱るぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるはと、尋ね給ひければ、府生殿の御馬に候ふと答へけり。こはめでたき事かな。阿字本不生にてそあなれ。うれしき結緣をもよつるかなとて、感涙をのごはれけるとぞ。

〔語解〕栂尾の上人。釋高辨なり。明惠上人といふ。山城ノ國高尾の西北なる栂尾に住す。故に栂尾の上人と云ふ。寛喜四年正月十九日寂す、年六十○あし〳〵といひければ。馬の足をあらふとき足を上げよといふ詞なると、上人の耳には阿字々々と聞えたるなり○宿執開發。句解に曰く、宿世にて修練したる功德の開發して、今阿字ととなふとあり○阿字。眞言宗の祕密の觀法なり○府生殿。近衛、衛門、兵衛に在る官なり○阿字本不生。句解に曰く、翻二阿字一有二無不非三義一。本不生者有二遮情表德兩義一。遮情本不生者諸法本來空義也、空則畢竟不生。如レ此觀而遮二凡夫迷情一。故名二遮情本不生一。表德本不生者見二聞融三知一一諸法一。皆與法性深理相應。表二顯法一然。自レ爾功德諸法。皆此本有二常住一也。是名二表德本不生一。本者本有義。不生者不始生義也。栂尾の上人は眞言祕密の觀法と修せられし人なれば、足を阿字と府生と本不生と聞きなせるなり○結緣云々。とのこの足府生といひしと、上人は阿字本不生と聞きなせる感應のいたり、涙と拭ひて殊勝奇特なりと悅ばれしとなり。結緣とは宿執のよき人に緣と結ぶと云ふ。

第百四十五段

御隨身、泰重躬、北面の下野ノ入道信願を、落馬の相ある人なり。能々つゝしみ給へといひけるを、いとまことしからぞ思ひけるに、信願馬より落ちて死にゝけり。道に長しぬる一言、神のごとしと人思へり。さていかなる相ぞと人の問ひければ、きはめて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、此の相をおほせ侍りき。

いつかは申誤りたるとぞいひける。」

〔語解〕隨身。近衛の舍人の兵仗と帶し供奉するものゝ稱なり○重躬、信頗、ともに系譜詳ならず○道に長じぬる。人相と觀る道に長ずるあり○桃尻。鞍の上に尻のうきて定まらぬといふ。桃は器物によくすばらぬものゝあればなり○沛芠。この字は文選の東京賦に見えたり。注に綜曰、沛芠作二姿容一貌也、善曰馬行貌とありて、馬のおどりあがる如く、疾く走り行くと云ふなり○此相とおはせ。おはせは課の字なり、課は試なり、計あり○いつかは云々。何時も相しあやまらぬとなり。このはゝ反語の格なり。

第百四十六段

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、おのれ若兵仗の難やあると尋ね給ひければ、相人、試に其の相おはしますと申す。いかなる相ぞと尋ね給ひければ、傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおぼしよりてたづね給ふ。是既に其のあやぶみのきざしなりと申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。」

〔語解〕明雲。久我太政大臣雅實公の孫、顯通卿の子にて、叡山の座主となれり。要覽云、優瞻顯扳者名二座主一謂二一座之主一○相者。少納言入道信西をさす○兵仗。兵器刀戟の總名なり○傷害のおそれ云々。弓箭刀戟にうこなはるゝ恐れはあるまじき座主の御身にて也○はたして。決斷の義にて其の通りとなり○矢にあたり。壽永二年十一月十九日木曾義仲、法住寺殿を攻むるとき、木曾が將士楯六郎親忠が放つ矢にあたりて身まこらる。事は源平盛衰記に見ゆ。

第百四十七段

灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふ事、ちかく人のいひ出せるなり。格式等にも見えぞとぞ。

〔語解〕灸治。灸ともて病を治療するなり○神事にけがれあり。神道の吉田家にては、灸治三所まではくるしからず。四所以上あればけがれの事といへり○格式云々。嵯峨天皇の時弘仁格、弘仁式と撰す、淸和天皇のとき貞觀格、貞觀式と撰す。醍醐天皇のとき延喜格、延喜式と撰す。是と三代格式といふ。これらものにも明記せる事なしとぞ云ふとなり。

第百四十八段

四十以後の人、身に灸をくはへて三里をやかざれば、上氣の事あり。必灸すべし。」

〔語解〕明堂灸經云、男子三十已上不可不灸三里。三里所以下氣也。これらによりて、此說は起りしなるべし。

第百四十九段

鹿茸を鼻にあてゝ嗅べからぞ。ちいさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。」

〔語解〕鹿茸。和名シカノフクロヅノなり。本草云、鹿茸不可以鼻嗅。其茸中有小白蟲。視之不見、入人鼻必爲蟲顆。藥不及也。

第百五十段

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、おまじひに、人にまられじ。うちくよく習ひえて、さし出でたらんこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひうる事おし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしりわらはるゝにも恥ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性其骨なければ、道になづまぢ、みだりにせぢして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ、人にゆるされて、ならびなき名をうる事なり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪の聞えもあり。無下の瑕瑾もありき。されども、其の人、道のおきてたゞしく、これをおもくして、放埒せざれば、世のはかせにて、萬人の師となる事、諸道かはるべらぢ。

〔語解〕能とつゐんとする人。藝能と覺えんとする人○うちくし　内々なり○堅固のたゞくしくして其の能に疏通せぬ義なり○のたは。のたは。不具といふ○つれなく。強顔の意にてシブトク過行するなり○たしむ。嗜好なり○天性其骨なければ。生れつき藝能に器用ならねどもなり○なづまず。拘泥せずなり○堪能の云々。藝能とよくするに堪たる器用といふ○徳たけ。たけは長なり老なり○瑕瑾。瑕は疵のある玉なり。瑾は無疵の美玉なり。野槌、句解等の註に、二字ともに玉のきずと云ふ意にかけるは非なよし見ゆ。しのれば茲は瑕疵の文字の義としてよまば、よろしからん。原字に拘はるべからず○放埒。みだりなることなり○はのせ。博士なり。

第百五十一段

或人の云はく。年五十になるまで、上手にいたらざらん藝をば、捨つべきなり。はげみ習ふべき行く末もなし。老人の事をば人もえわらはぢ。衆に交りたるもあいなくみぐるし。れはかた萬のまわざはやめて、暇あるこそめやすくあらまほしけれ。世俗のことにたづさはりて、生涯をくらすは下愚の人なり。ゆかしく覺えむ事は、學びきくとも、其の趣をしりなば、おぼつかなからぢしてやむべし。もとよりのぞむ事おくしてやまんは、第一の事なり。

〔語解〕年五十になるまで、上手にいたらざらん云々。論語、子罕ノ篇、四十五十而無聞焉斯亦不足畏也已、かやうの古語と同じき意味合なり○あいなくみぐるし。あいなくは、品格なき意なり。前に雪のゐしらといたゝきて壯なる人に交はるなどいふと同心なり○ふはのた萬のまわざはやめて云々。老人は藝のみならず、大概萬事を捨てゝ身と閑にして隙あるころなり○めやすく。見易くなり○生涯　いける一期といふことなり○ゆかしく覺えむ事は學びきくとも。もの しく覺えむ事は、其藝と學びきゝ知るとも。其藝道のやうすと知りなり○其趣を志りなば。

ばとなり○おぼつかなくおらずしてやむべし。その藝道の大躰を知りゐば、奥儀までと心ざゝずおぼつかなからずして、不安心の所なきまで、學びてやむべしとなり○もとよりのぞむことゐくして云々。前にはもかしく是非に知りたきと云ふ人のことと云ひ、爰には又一段深く、元來老人は、諸藝を望むことなく、たゞ老を慰めて止まんが第一の得策ぞとゐり。

第百五十二段

西大寺の靜然上人、腰かゞまり、眉をろく、誠に德にたけたるありさまにて、内裏へまゐられたりけるを、西園寺、内大臣殿、あおたふとのけしきやとて、信仰のきそくありければ、資朝、卿これを見て、年のよりたるに候ふと申されけり。後日に、むく犬の、淺ましく老さらばひて、毛はげたるをひかせて、此の氣色たふとく見えて候ふとて、内府へまゐらせられたりけるとぞ。

〔語解〕 西大寺。大和國七大寺の一にて、同國添上郡にあり○靜然上人。姓名明ならず○西園寺内大臣殿。左府公衡公の男實衡公なり。又竹林院と號す○あなたふとのけしきや云々。西園寺殿、靜然上人を見て、あゝ尊き德ある人は、其德、外に表はれていと尊しと、靜然上人とほめたるゐり○資朝卿　權中納言從三位檢非使別當藤原資朝卿なり。父は日野俊光卿なり。後醍醐天皇の時の人なり○年のよりたる云々。其智德の如何とも知らで、たゞ腰かゞまり、眉白きばゐりに信仰の氣色し給ふは、信仰は、年のよりたる丈にて候ふゐとの意ゐり○むく犬。尨犬なり○淺ましく老さらばひて云々。淺ましくは、俗に甚しき意なり。老さらばひては、年老いやせ衰へて、骨ばゐりになりたると云ふなり。卽ち老たるものが、たふとくば、此むく犬も靜然上人の如く、毛はげて尊ゐりなむとて、内府へ送られたりとなり。俊頼の歌に、「山陰にやせさらばへる犬櫻おひはなたれて問ふ人もゐし」さらばふは、髏の字ゐり。莊子至樂篇曰、莊子之楚見二空髑髏一、髐然有レ形とあり。又源氏末つむ花に、いとゝしげにさらばひてともあり。

第百五十三段

爲兼大納言入道、めしとられて、武士どもうちかこみて、六波羅へゐて行きければ、資朝卿、一條わたりにてこれを見て、あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくてそあらまほしけれとぞいはれける。

〔語解〕 爲兼大納言入道。藤原爲兼卿は、定家卿三代の孫、從二位左中將爲敎卿の子ゐり。毘沙門堂の大納言といへり。文段抄曰く、爲兼大納言、伏見院の御宇、永仁六年二月中納言爲兼謀の風聞有りしによりて、北條家よりめし取て、佐渡に流され給へり。嘉元二年に歸洛の後、大納言に任せらる。二條家、冷泉家二流の外に、又爲兼一流亡て和歌の一家なりしと○六波羅　北條氏其一族と京師におきて、幾内及び西國の政務を執行せしむ。これと六波羅と云ふ。東鑑に詳ゐり○わたり。邊なり○あなうらやましは、あゝ羨ましとゐり。世にあらん思ひ出は、此世にあらんかひにはの意なり。簠抄に曰く、爲兼のめし捕れた

ると、資朝卿の見て、おなうらやましと云へる心をつら〳〵思ふに、北條氏鎌倉に居ながら、帝王となみし、幼稚と立て將軍とし、其身ほしいまゝに國家をのすむること年久し、われ朝廷の臣として、君と延喜天暦の時のごとくし、北條を亡してみづからの國政をとらんと思ふ故に、男たる者、身死して土ともおらばあれ、若本意をとげて敵と又のくのごとくせんものをと思へば、誠に爲兼が世にあらん思ひ出、かくあらまほしき事なるべしと、資朝卿の心の言葉にあらはれたるあり。其氣分は、楚石乞が事成爲卿。不成而烹。固其職也といひ。前漢の主父偃が大丈生不二五鼎食一。死卽五鼎烹耳といへる心あるべし。

第百五十四段

此の人、東寺の門にあまやどりせられたりけるに、かたは者どものあつまりたるが、手も足もねぢゆがみうちかへりて、いづくも不具にてとやうなるを見て、とり〴〵にたぐひなき曲者なり。もつとも愛するにたれりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがて其の興つきて、見にくゝいぶせく覺えければ、たゞすぐほに、めづらしからぬ物には志かぞと思ひて、歸りて後、この間うゑ木を好みてことやうに曲折あるを求めて、目をよろこばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なくおぼえければ、鉢にうゑられける木ども、皆ほりすてられにけり。さもありぬべき事なり。

〔語解〕 此人。資朝を指す。上の段に名を書きたる故に、こゝには略してのく云へるなり○ねぢゆがみうちかへりて。ねぢは、屈ぢなり。ゆがみは、曲みなり。うちかへりは、ろり反りてなり。此れ不具者の狀態を形容せる詞なり○不具にことやう。不具は身体の不完備なる者を指す。卽ち普通人間に異なる樣を見てとゝり〴〵に云々。一々他に類もみき、一くせあるもの供となり○まもり。俗に云ふミツメてなり○其興つきて。其初めは、面白き興味ありと思ひし事も、今はさめはてゝなり○いぶせく。訝の字、又は不審の字を充つ。爰にては忌々しき意にとるべし○鉢。植木の鉢なり○さもありぬべき事なり。兼好も同感にして、庸人ならぬ人は、さやうにあるべきことであるとなり○句解に云く。此人の志氣なみ〳〵にはあらず、萬事常に隨て異を好むべからざる道理を、のたは者を見て感する智の勝れたる所を云るしぬ。又宿に歸りて、鉢にうゑたる木をはりてそてられたるは、過を改るに最もをみやのある行なり。いづれも後人の龜鑑なるべし。

第百五十五段

世にあたがはん人は、まつ機嫌を知るべし。ついであしき事は、人の耳にもさかひ、心にもたがひて、其の事ならぬ。さやうの折ふしを心得べきなり。

〔語解〕 世にあたがはん人は。世の風潮に從て事を爲さんとする人と指す○機嫌。字書ノ注に曰く機は發なり善惡の動き出んとする、弓の既に放たんとする所と云へり。嫌は嫌疑なり。うたがはしく分明ならぬ所といへり。然れば人と交際するには、對ふの人の喜ぶ氣色を、又怒れる氣色

と見て、うれぞと知ることと、卽ち機嫌と知ると云へり。北村季吟翁云く、中阿含經に、預知二機嫌一とありて其より來れる佛語なる由に見も。涅槃經ノ比本四十云具二足知愚一預見二譏嫌一云々。なども有り○ついでゐしき事は。婚姻の儀式に臨ひて、不吉の事と云ひ、又病人老人あゞの前にて、最早死するのみと語るが如きといふなり○ろの事あらず。人ともゝと語るにつけ、又は事と願ふにつけ、機嫌の惡しき時に云ひ出せば、其事成就せずとなり○さやうの折ふし。左樣の時ととなり。

〔文格〕 耳にもさのひ、心にもたがひ」は、對句法の精格なり。

但、病をうけ、子うみ、死ぬる事のみ、機嫌をはからぞ。ついでゐしとて、やむことなし。生住異滅のうつりかはる實の大事は、たけき河のみなぎりあがるゝがごとし。ゑばしもとゞこほらぞ、たゞちにおこなひゆくものなり。

〔語解〕 病とうけ云々。病と產と死との三事は、機嫌と見てよき樣にせんと云ふこと叶はず。又ついでゐしとて止むべきものならずとなり○生住異滅。藏乘法數に云く、四相に麁細あり。生死病死は麁の四相なり。生住異滅は細の四相なり。生は生れ出づる處。住は人間に居住して老身となるといひ。異は病とうけて異形となるといひ。滅は死去なり○うつりのはる。此の生住異滅のうつりのはりなり○たけき川。急流なる川をさす○みなぎりは漲の字なり。水流の早き川の漲り流るゝが如くに、生住異滅は轉移するとなり○ゑばしもとゞこほらず云々。暫時たりとも停滯せずとなり。論語子罕篇云。子在二川上一曰逝者如斯夫不レ舍二晝夜一。古歌に云く、「行く水と過る齡と散花といつれまでてふことゝはまし」と云ふが如きさまなり。

されば、眞俗につけて、必ぞはたし遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからぞ。とかくの用意なく、足をふみとゞむまじきなり。

〔語解〕 ○されば。上句と承けたる詞なり○ 眞俗。眞は出世間と云ひ、俗は世間と云へり○とかくの用意なく。とやかくと、世間の事に心と用ふることなくしてとなり○足とふみとゞむまじき。世間の事にかゝはりて足とふみとゞめて、猶預する事あるまじきとなり。

春くれてのち夏になり、夏はてて秋のくるにはあらぞ。春は頓て夏の氣をもよほし、夏よりすでに秋はかよひ、秋はすかはちさむくなり、十月は小春の天氣、草も青くかり、梅もつぼみぬ。木の葉のおつるも、まづ落ちてめぐむにはあらぞ、下よりきざしつはるにたへぞしておつるなり。むかふる氣、下にまふけたる故に、まちとるついで甚はやし。

〔語解〕 春くれて云々。六韜曰春道生万物榮。夏道長万物成。秋道斂万物盈。冬道藏万物靜。盈則藏。藏則復起。莫レ知レ所レ終莫レ知レ所レ始。と同意匠なり○夏の氣ともよほし。春の氣の溫

暖なるは、是ぞ卽ち、夏の炎熱を催す原因となり○十月は小春の天氣、小春は十月の異名あり。萬花谷時令考曰小陽春云々、註曰、十月有二天氣和暖一有レ似二於春一故名レ之○梅もつぼみぬ。是れ冬よりまた春の氣を催すあり○下よりきざしつはる云々。下根より目ざし熱昇するが故に、餘義なく、勢つき熟して零落するとなり○むのふる氣。冬の中より春を迎ふる氣の意あり○まちとるついで。木の葉の落ると待とる次第の早と云ふなり。

〔文格〕 此の一章の文勢、前後の章に推渡して、よく味ふべし。筆力の妙は、爰と方つけて示しがたくあむ。

生老病死のうつり來る事、また是に過ぎたり。四季は猶定れるついでなり。死期はついでをまたぞ。死は前よりしも來らぞ。かねてうしろにせまれり。**人皆死**あることを知りて、まつことしかも急ならざるに、覺えぞして來る。沖のひかたはるかあれども、磯より鹽のみつるが如し。

〔語解〕 是に過たり。四季ノ轉廻よりも、人間の生老病死は尙速ありとなり○四季。四季は次第ある故に、四序とも、節序とも云ふなり○死は前よりしも來らす云々。人類の死するは、此の世に生れて、而して病みて死するなれば、卽ち死は生と共に前より來るが如くなれど、しのはあらず。論語に前に在るのとすれは、忽然として後に在りと云ふが如く、一定して居らぬものなり。「しも」は助語なり○沖のひたる時には、海面陸地と成りて、再び潮の來む時迄は、暫く時間あるならんと思へども、其實しのはあらで、潮は忽ち磯の方へ早くさし來り滿つるとなり。是れ潮流と引きて、死期の早きと云へるなり。白居易潮詩に、早潮纔落晚潮來。一月周流六十廻。不二獨光陰朝復暮一杭列老去被二潮催一とあり。

第百五十六段

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけておこなふ、常の事あり。宇治の左大臣殿は、東三條殿にて行はる。內裏にて有りけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることのよせなけれども、女院の御所おぞかり申す、故實ありとぞ。

〔語解〕 大饗。こは太政大臣、左右大臣、內大臣に任せられたる披露の宴を指すなり。江次第二曰。大臣家大饗正月四日、左大臣大饗五日、右大臣云々是式日也。而近代任二大臣一明年正月行レ之、不レ行二大饗一大臣不レ向二饗所一藤氏一大臣、用二朱器臺盤一以二其日一可レ行由、以二職事一達二天聽一是レ非二式日一時、依レ可レ遣二蘇甘栗使並饗錄樂部等事一歟云々○さるべき所。大饗と行ふに然るべき所と云ふなり○宇治左大臣。知足院關白忠實公の二男、從一位左大臣賴長公なり○東三條殿。こは殿の名稱なり。拾芥曰四條院誕生所。或重明親王家云々。二條南、町西、南北二町、忠仁公家、貞信公大入道殿傳領。長久四年四月晦日燒亡○させることのよせなけれども。さして大事を

寄せ附けることにもあらねどもなり。卽ち御一門などいふ事のよせもあらねどもなり○女院。國母に院號と奉りたると云ふなり。此は一條院の母后、東二條院より始まれりと文段抄に見ゆ。

第百五十七段

筆をとれば物かゝれ、樂器をとれば音をたてんとおもへ、盃をとれば酒を思ひ、賽をとれば攤うたん事を思ふ。心はかからぎ事にふれてきたる。かりにも不善のたはぶれなすべからぎ」。あからさまに聖教の一句を見れば、何とおく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非をあらたむる事もあり。今此の文をひろげさらましかば、此の事を知らんや。是則ふるゝ所の益なり。心さらにおこらぎとも、佛前にありて、ぎゝをとり、經をとらば、おこたるうちにも、善業おのづから修せられ、散亂の心おがらも、繩床に座せば、おぼえぎして禪定おるべし。」事理もとより二ならぎ。外相もしそむかざれば、內證かからぎ熟す。しひて不信といふべからぎ。あふぎてこれをたふとなべし。

〔語解〕樂器。琴笛の類と云ふ○賽ととれば。双六などとなすとき用ふるものなり○攤うたん云々。双六の事と指す。杜甫夔州歌曰白晝攤錢高浪中。箋注曰攤錢とは蜀人錢と賭にするの名と、故に爰には賽に對して攤うたんとあれは、双六とおけにて打つ義と知るべし○あからさまに。白地の文字を充つ。苟くもの義なり○聖敎。佛敎の經書と意味す○卒爾。論語先進ノ篇の集注に曰く、卒爾は輕遽の貌、卽ち「にはかにして」の義なり○今。此の文云々此の聖敎と見たればこそ、多年の非も知て、實に善事に觸るゝ益あることも知り得たれとの義なり○善業。よき業と云ふ○散亂の心。靜謐ならぬ心おり○繩床。心の散亂なると治むる座禪工夫の床おり。繩と以て作りたる粗末なる床なり。今も禪宗の諸寺に用ふるおり○禪定。心の靜おに定まると云ふと句解にあり。僧史略ニ曰く、禪とは卽ち、定惠の通稱、明心達理の趣なりと○事理もとより二ならず。句解に、心にさとると理とし、身に行ふと事とす。事と理とと各々別にして一方に偏すると、理障事障と云ひてさらふなり。事理不二とたつるは、元より台家の論なり○外相云々。外面の處作まづ道義に反背せざる樣なれば、自然と心に覺りて善事と爲す人に成るとなり○しひて不信といふおらず云々。外形にして背おのねば、內心必ず熱すと云ふことを、强て疑とおこして、信じ難きことと思ふべおらず。仰て此語と尊み守り行ふへしとなり。

〔文格〕筆ととれば物おゝれ、樂器ととれば音たてむと思ふ」盃をとれば酒と思ひ、賽ととれば攤うたん事と思ふ」は、疊句法の粗格おり。ずゞととり經ととらば云々、散亂の心おがちも繩床に座せば云々」は、長疊法の粗格なり。

第百五十八段

盃のそこをすつる事は、いかゞ心得たると、或人のたづねさせたまひしに、凝當と申侍れば、當に凝りたるをすつるにや候ふらんと申侍りしかば、さにはあら

ぞ、魚道なり。ながれを殘して、口のつきたる所をすゝぐなりとぞ仰せられし。

〔語解〕盃のろことすつる。盃の酒と飲みて、底に沈澱したる糟とすつるなり○或人にたつね。兼好に或人のたつねたりとなり○凝當と申待れば云々。凝は水堅なり。當は底なり。兼好の云ふには、凝當といふことあれば、盃の底に、濁りたる物の溜るを捨つる意ならんとあり○魚道。下學集に曰、魚道は殘盃と建するゝ。餘瀝と以て盃痕と洗ふ、之と魚の舊道と過ぐるに喩ふ。故に魚道といふなり。魚は大海に游泳すと雖も、終に舊道を忘れざるものなりと。要するに、是れ或る人の說の如く、少し飲み殘して、口のつきたる所を洗ひ清むるに喻へたるなり。

第百五十九段

みなむすびといふは、糸を結びかさねたるが、蜷といふ貝に似たればいふと、あるやんごとなき人、仰せられき。になといふは、あやまりなり。

〔語解〕みなむすび。句解に、公家の表袴、或は聖道の袈裟などの、ゐざりに糸と以てむすびさぐるあり。是をみなむすびといふとあり○蜷といふ貝。和名抄に、崔禹錫が食經に曰く、河貝子、和名美奈俗に蜷の字と用ふるは非なり。音は拳、連蜷虫屈る貌なり。殼上黑うして、小狹にして長し、人身に似たるものなりとあり。

第百六十段

門に額かくるを、うつといふはよからぬにや。勘解由小路の二品禪門は、額かくるとの給ひき。見物の棧敷うつもよからぬにや。ひらぱりうつなどは常の事か

り。棧敷かまふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなぞ云ふなり。行法も法の字をすみていふわろし。濁りていふと清水寺僧正仰せられき。常にいふことに、かゝることのみ多し。

〔語解〕門に額のくる。諸社宮殿の門に額と掲る事をうつといふは、よからずとなり。平家物語に額うちとあり○勘解由小路の二品禪門。藤原鎌足二十三代の孫、從三位宮內卿行尹卿の男、正二位參議行忠卿なり。世尊寺と號す○ひらぱりは云々。地上に枠と立て、其上に板と敷き、四方と幕などにて張りまはしたると云ふ。平張の文字を書くなり。是と通例棧敷うつと云ふなり○護摩たく云々。護摩は梵語なり。我國之と飜譯して焚燒とす。然れば護摩とたくと云ふは、落馬して馬より落ちたりといふが如く、重復の言語なる故に、たくと云ふ事を嫌ふなり○行法。こは眞言宗などにて、法事すると意味する語なり。或る僧云く、こは其宗派に依りて、淸と、濁とに讀むなり。强ちすみてのみ讀むべきにあらずと○淸閑寺僧正。道我のことなり。兼好集に兼好が關東へ下向の時、餞別として彼が詠みたる歌あり。拾芥抄に、淸閑寺は佐伯公行の建立する所なりとあり。

第百六十一段

花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後、七日ともいへど、立春より七十五日、おほやうたかはぬ。

〔語解〕花のさかり。我國にて花とばかり云ふは、櫻花をさすなり。これ猶成都にては海棠と花といひ、洛陽にては牡丹と花といふが如し○時正。彼岸の中日と云ふ。句解に時正の義は、晝夜の時正しく、長短等しき故に名付けたるありとあり○ふはやうたるはず　大方相違ありとなり。

第百六十二段

遍昭寺の承仕法師、池の鳥を日來かひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸ひとつをあけたれば、數もあらぬ入りてもりける後、おのれも入りて、たてこめて、とらへつゝころしける、よそはひおどろ〳〵しく聞えけるを、草かるわらは聞きて、人につげければ、むらのをのこどもおとりて、入りて見るに、大雁どもふためきあくる中に、法師まどりて、打ふせねぢころしければ、此の法師をとらへて、所より使廳へ出したりけり。ころす所の鳥を、くびにかけさせて禁獄せられにけり。基俊大納言別當の時にぶん侍りける。

〔語解〕遍照寺。寺の名稱なり。山城國嵯峨にあり○承仕法師。承仕と云ふ名の僧侶にはあらず、師匠の命と承けて雜事と務むる者とさすなり○よろはひおどろ〳〵しく。源氏桐壺の卷に、おどろ〳〵ざうとあり。おどろ〳〵は、ふびたたしく、又はふるろしきなどの意義なり○使廳。檢非違使の廳なり。こゝの長官と別當と云ふ。最も權勢ありし事國史に見ゆ○禁獄。此は今日の監獄のごとし。

第百六十三段

太衝の太の字、點うつうたぎといな事、陰陽のともがら、相論の事ありけり。もりちか入道中侍りしは、吉平が自筆の占文の裏にかゝれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたりと申しき。

〔語解〕太衝。字彙に、衝は通道なりとあり。卽ち日月五星の出づる所の門戸天の衝なり。然れども此にては、九月の異名と知るべし○陰陽のともがら。陰陽道の輩とさすあり○もりちの入道。傳記不詳○占文云々占トの判斷書なり古は記錄と反古の裏に書する例いと多し。

第百六十四段

世の人あひあふ時、しばらくも默止する事なし。かぎらぬ言葉あり。其の事を聞くに、おほくは無益の談あり。世間の浮説、人の是非、自他のために、失おほく、得すくなし。これをかたる時、たがひの心に、無益の事なりといふ事を知らぬ。

〔語解〕默止。ものと言はぬ義あり○世間の浮説。世上に流浮する無根の雜説なり○無益の事あり云々。何の氣もなく、ウカ〳〵と談話して、相互に無益なるに心付かずとなり。

〔文格〕世間の浮説、ひとの是非」は對語法の精格あり。

第百六十五段

あづまの人の、都の人に交り、みやこの人の、吾妻に行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる、顯密の僧、すべて我俗にあらぬして、人にまじはれる見ぐ

るし。

〔語解〕あづまの人。あづまは東國の總稱なり。こは日本武尊東征の時に初れり○顯密の僧。顯は、佛說とあらはに說きさのす、天台宗などなり。密は眞言宗秘密の法なりと、文段抄に見えたり○我俗。我が風俗なり。卽ち出家に對して通常人は俗人なれば、我俗とは世人のことをさす義なり。

〔文格〕東の人の都の人に交り、みやこの人の吾妻に行き」對句法の粗格なり。故にまじはりよりも、吾妻に行きよりも、ひとしくてに係る文脈をなす。對句の下へ係る格は、すべて此のさまなり。疊句にはかく係る格なし。

第百六十六段

人間のいとなみあへるわざを見るに、春の日に雪佛を作りて、其のために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔をたてんとするに似たり。其のかまへをまちてよく安置してんや。人の命ありとみるほども、下よりきゆること、雪の如くなるうちに、いとなみまつこと甚だおほし。

〔語解〕いとなみあへるわざ。人の種々なる營業なり○雪佛と作りて。雪佛を作るは冬日なるも、此に春の日と特にことはりたるは、其消えやすきさまといへばなり。一体、禪宗にては、雪佛を作る例あり。夫の雪達磨、雪布袋など云ふことは、全く禪家より出でたる名稱ありとぞ○珠玉

玉とは山より出づるもの、珠とは海より出づるものゝ稱なり○其のかまへをまちて云々。かまへは、堂塔の構なり。卽ち其堂塔の構造の竣工するまで、雪佛は存在せずとなり○安置。佛をすゑ置くを云ふ○人の命ありと見るほども云々。人命も猶雪佛の如し。今日無難に生存する人は、將來の事などを考へて、種々の設計をなすなれども、此は實に憐れ果なきことにて、夫の人命は雪佛の如くに、其の消ゆること、早きを知らざるなりとの意なり。

第百六十七段

一道にたつさはる人、あらぬ道のむしろに望みて、あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものをといひ、心にもおもへること、常の事なれど、よにわろく覺ゆるなり。しらぬ道のうらやましく覺えば、あなうらやまし、などかならはざりけんといひてありなん。我が智をこり出でて、人にあらそふは、角あるものゝつのをかたぶけ、牙あるものゝきばをかみいだす類なり。人こしては善にほこらず、物とあらそはざるを德とす。他にまさる事のあるは、大なる失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人はたとひ言葉に出してこそいはねども、內心にそこばくのこがあり。つゝしみてこれをわするべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、わざはひ

をまねくは、たゞ此の慢心なり。一道にも誠に長じたる人は、自あきらかに其の非をおる故に、志つねに満たぎして、終に物にほこることなし。

〔語解〕一道にたつさはる人。何の藝道なりとも、其一に通じたる人なり○あらぬ道のむしろ。我が専門外の道の座席なり○あはれ云々。あゝ已が心得たる道あらむには、このやうに餘所には見ぎじとの義なり○よにわろく覺ゆるなり。此のよの字は、餘の字義にて、あまりに惡く覺ゆるとなり○などこのならはざりけん。若年の時より、どうして其道を習はずしてありけん。實に殘念なることゝおもふ○我が智ととりて出で云々、我智識と出して、他人と優劣を決するはなり○角あるものは云々。是は他人の智を無視して、我が智を自慢するは、宛然牛鹿などの角をのたひけて、互に爭ふに齊き類なりと也○人として云々。人は万物の靈長にて禽獸より優長なる甲斐には、善能にはこらずして爭論などせぬを德とはなすとなり○他にさることのあるは。他人より優るを思ふ心のあるはなり○大なる失なり。大失德なるものとなり○品の高さにても。品位品格の高き人にてもの義なり○言葉に出してこそいはねども。言語に發して言はざれども同じなり。○とこにも見え。とこは、嗚呼の字を以て充つ。今の俗言にて愚の、又はをこがましくといふ義に通ふべし○いひけたれ。言ひ消れといふ義なり○慢心。自慢の心なり。

第百六十八段

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、此の人の後には、誰にかとはんなどいはるゝは、老のかたうどにて、いけるもいたづらならぎ。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生此事にて暮にけりと、つたなく見ゆ。今はわすれにけりといひてありけん。大かたは知りたりとも、すゞろにいひちらすは、さばかりの才にはあらぬやと聞え、おのづからあやまりもありぬべし。さだかにもわきまへ知らぎなどいひたるは、猶まことに道のあるじとも覺えぬべし。まして知らぬ事、おたりがほに、おとおしくもどきぬべくもあらぬ人の、いひきかするを、さもあらぎと思ひながら、聞きゐたる、いとわびし。

〔語解〕才能。才智藝能なり○老のかたうど。老功の其道の人と云ふ意なり○ろれもすたれたる所のなきは。一生その藝道と捨てずに勤むるはなり○すゞろにいひちらすは。前後もはからず、漫然發言すはとなり○さばかり。さ程の義なり○さだかにもわきまへ知らず。確乎と辨知せぬ義なり○猶まことに道のあるじとも覺えぬべし。猶は奥ゆかしく、其道の達人とも思はるゝおらんとなり。あるじ、は主人なり○ふとなしく。大人らしくとなり○もどきぬべくもあらぬ人云々。忠告すべくもあらぬ人の、まことしやかに云ひなすと、其人の言ふことたる、正理ならずと思ひなこのらも聞居るは、いと不愉快なることとなり。

第百六十九段

何事の式といふ事は、後嵯峨の御代までは、いはざりけるを、近き程よりいふ

ぶりと人の申侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位のゝち、又うちぎみおたることをいふに。世の式もかゝりたる事は、なきにもと書たり。

〔語解〕何事の式。世に行はるゝ儀式などの事なり○建禮門院。高倉天皇の后、安德天皇の御母なり○右京太夫。建禮門院の女官にて、藤原伊行が女なり○うちずみ。内住と書くゐり。文段抄に、平家沒落の後、後鳥羽院に宮仕して、内裏にすまはれし事なりとあり○世の式ものはりたる事云々。右京太夫のいひし詞を、此に引きたるにて、右京太夫は平家沒落後、再び宮仕へして見るに、其風俗、格別に以前と變りたる事もなきにもやとなり。其の家集に書きたりとなり。委しくは野槌と見るべし。

第百七十段

さしたる事なくて、人のがりゆくはよらぬ事なり。用有りて行きたりとも、其の事はてゝば、とく歸るべし。久しくゐたるいとむつかし。人とむかひたれば、詞おほく。身もくたびれ、心も閑ならぬ。萬の事さはりて時をうつす、たがひのため益なし。いとはしげにいはんもわろし。心づきなき事あらん折は、なか〳〵にて、いそのよしをもいひてん。れおじ心に向はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて、まゐぼし、けふは心をづかになどいはんは、此のかぎりにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに人のきたりて、のどかに物がたりしてかへりぬるいとよし。また文も久しくきてえさせねば、などばかり、いひおこせたる、いとうれし。

〔語解〕さしたる事。させる用もあらぬ事なり○人のがりゆくは。がりは許ゐり、卽ち人の許へに行くはなり○久しくゐたるいとむつかし。人の許に長坐するは、最も難義なるものとゐり○人とむかひたれば。人と對坐したればなり○いとはしげにいはんもわろし。客無益の長談とゐしたりとて、亭主は厭きたる躰に言はむもわろしとゐり○心づきなき事あらん云々。句解に、心づきなき折とは、客とゐしろふに、わが心のろはぬ折といふとあり。なか〳〵は、このへりてにて俗に「けつく」といふ義に通ふなり。さてこゝのいとはしげ以下の心は、我方に用のある折なども客のきたれるに、厭ふ振りにあいしらひ、客のおのれと歸るやうに振舞はむは、客の感情とわろくすべきもの也。客に對するに、心のろはぬ用ある折は、けつく初よりその用の子細と語りて、此方より斷りて歸したるがよきとなり○おなじ心にむのはまほしく思はん人の。同感の友に遇はんことと思はん人はとなり○阮籍が青き眼。阮籍は、竹林七賢人の一なり。己れにあふ友には青眼となし、あはぬ人には白眼となせりしは、晉書に詳なり。そと兼好、此に引證したるは、誰も好惡の心あるべきと言はん爲なり○ろの事となきに云々。させる用事はなくとも、親友の訪ね來りて、長閑に物語して歸るは、甚よきとゐり。これ朋友の安否と見舞ふ禮なればなり○きこえさせねば。安否と久しく問はねばなり。

貝をおふ人の、我がまへなるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、ひざの下まで、目をくばるまに、前おるをば人におはれぬ。よくおはふ人は、よそまでわりなくとるとは見えぎして、ちかきばかりおはふやうなれど、おはくおはふなり。碁盤のすみに、石をたてゝはじくは、むかひなる石をまもりて、はじくはあたらぎ。わが手もとをよく見て、てゝなるひじりめをすぐにはじけば、たてたる石かおらぎあたる。萬の事、外にむきて求むべからぎ。たゞこゝもとをたゞしくすべし。清獻公がことばに、好事を行じて、前程をとふてとなかれといへり。世をたもたん道も、かくや侍らん。うちをつゝしまぎ、かろくはしきまゝにして、みだりおれば、遠國かならぎそむく時、始めてはかりでとをもとむ。風にあたり、濕にふして、病を神靈にうたふるは、愚おる人おりと、醫書にいへるがごとし。目のまへなる人の愁をやめ、惠をほどこし、道をたゞしくせば、其の化とはくながれんことを知らざるおり。禹の行きて三苗を征せしも、いくさをかへして、德をしくにはしかざりき。

〔語解〕貝とおはふ。貝おはせの事なり。西行の歌に、「今ぞ知る二見の浦の蛤と貝おはせとておはふなりけり」とあり○石をたてはじくに。藝經に曰く、彈棊兩人局に對して白黑棊各々六枚、まづ棊を引きて相當れば、更にまた彈するなり。其局、石を以て之を爲す。とあるにて知るべし○ひじりめ。聖目と云ふなり。碁の井目は、井田の九百畝になぞらふといへり。ろの井目とは聖目と書き、而して又ひじりめと云へるおり○たゞこゝもとをたゞしくすべし。我が手元を正しくすべしとなり○清獻公。言行錄後集曰。趙抃、清獻公、字閱道、衢州人、舉二進士一事二仁一宗英一宗神一宗二官至二參政一。又云、清獻公座右銘云、行二好事一莫レ問二前程一とあるにて知るべし○好事を行じて前程を問ふことおるのれ。好事を行じて云々、只手前を正しくして、外にもとむる事勿れといふ意おり○世をたもたん道もかくや侍らん。國家を治むる道も、猶一身一家を修むるが如くならむとなり○內をつゝしまず內證を愼しまずなり○輕くはしきまゝにしてみだりなれば。行爲を輕率にして放恣なればおり○遠國必ずろむく時。時は政治行はれずして、遠國の民、叛亂を起す時をさす也○はじめてはのりごとをもとむ。人民叛旗を擧げたるによりて、初めて國家を治むる謀事を求むとなり○風にあたり云々。人にして其身の攝生を顧みず、徒に血氣にはやりて、風に櫛り、雨に沐して、而して病をもとめ、ろれを神靈に祈禱して回復せんとするは、愚智の人なりとおり○目の前なる人の愁をやめ。朝に立つて人民を治むるものは、目前に民の苦難とする所のものを除きやめてとなり○其化とはくながれん事を知らざるなり。其德化は、遠くまで流布すべきを、さしも思はぬとなり○禹のゆきて三苗を征せしも。禹は、舜の天下を繼ぎて、天

子となりたる聖人あり。三苗は、國の名稱、南荆揚の間に在り。險と恃みて亂と舉けたる暴國なり○いくさとのへして云々。三苗と征伐そる軍とひき班して、德政と布き、而して以て人民を服從せしむるには如かざりし也との意なり。

〔文格〕 風にあたり、濡にふし」は、對句法の精格、愁とやめ、惠とはどこし、道と正しくせば」は、疊語法の一格なり。此の段も、貝おほひ圍碁などの事より、人道政道などに說き及せり。

第百七十二段

わかき時は、血氣うちにあまり、心、物にうでできて情欲多し。身をあやぶめて、くたけやすきこと、珠を走らしむるに似たり。美麗をこのみて寶をつひやし、是を捨て苔のたもとにやつれ、いさめる心さかりにして、物とあらそひ、心に耻ちうらやみ、このむ所、日々にさだまらぞ。色にふけり、情にめで、行をいさぎよくして、百年の身をあやまり、命を失へるためし、ねがはしくして、身のまたく久しからんことをば思はぞ。すけるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる。身をあやまつことは、わかき時のたわざなり。老いぬる人は、精神おとろへ、あはくおろそかにして、感じうでく所なし。心おのづからたづかふれば、無益のわざをおさぞ。身をたすけて愁おく、人のわづらひおからんことを思ふ。老いて智のわかき時にまされる事、わかくしてかたちの老いたるにまされるがごとし。

〔語解〕 わかき時。論語に曰く、少之時血氣未レ定。戒レ之在レ色。といふ意に同じ○身とあやぶめて。身を危くしてなり○珠と走らしむるに似たり。前漢書に板上に玉と走すが如しとあり。若年の時は、血氣さかんにして遠慮なければ、物に動き易きこと、宛も玉と板上に走らすと一般なりとなり○是と捨て苔のたもとにやつれ。是とすてゝは上とうけて云へるなり。卽ち美麗と好みて寶と費し捨てあり。苔のたもとにやつれは、袖のやぶれはて、苔のむし出づる如く、零落すると形容したるなり○行といさぎよくして。好色の爲にすこしも一身と亡す事と惜まで、一向に潔くする躰と云ふなり○百年の身とあやまり。身の一性と誤るにて、白氏文集、第四、新樂府井底引銀瓶曰、爲君一日恩誤妾百年身。の義に似たり○身のまたく久しからんこととは思はず。其身と全くせんことと思はぬとあり。またくは、全なり○すけるこのたに心ひきて。己が好ける方に心と引き動かされてなり○あがき世がたり。後世まで物語の種となりて、名と汚かすとなり○老いぬる人は云々あはくおろかにして云々。あはくは淡の字と書く。精神氣血淡薄にして、物に感溺し難しとあり○老て智のわかき時にまされること云々。老人にありて智慧の若年の時に優れるは、若年の時の容貌は、老年の時にまされるが如しとなり。

第百七十三段

小野、小町が事、きはめてさだかならぞ。おとろへたるさまは、玉造といふ文に

見えたり。この文、清行がかけりといふ説あれど、高野大師の御作の目錄にいれり。大師は承和の始にかくれ給へり。小町がさかりある事、其の後の事にや。猶おぼつかなし。

〔語解〕小野小町。中ゝ院准后親房卿の古今序ゝ注に、小野小町が事分明あらず。仁明天皇承和の頃の人、出羽ノ國の郡司が女、容色無双の人なりとあり○きはめてさだのならず。諸説紛々として、何れとも確のあらずとなり○清行。三善清行あり。寛平、延喜の頃の算道の達人なり○高野大師。弘法大師と云ふなり。其傳記は元亨釋書第一に詳なり○承和の始にのくれ給へり。弘法大師は、仁明天皇承和二年三月廿一日に、歳六十三にして入定したりとぞ○猶おぼつかなし。確乎と定め難しとなり。

第百七十四段

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくあるといふ。大につき小をすつることわり、誠に志かなり。人事れほかる中に、道をたのしむより、氣味ふかきはなし。是實の大事なり。一たび道を聞きて、これにてゝろざゝん人、いづれのわざかすたれざらん。何事をかいとなまん。おろかなる人といふとも、かしてき犬の心におとらんや。

〔語解〕ことわり。道理といふ義なり○道とたのしぶより氣味ふかきはあし。人の人たる道、又佛道などを樂むより、世の中に味ひ深きものはあらずとあり○何事とかいとなまん。この實の大事と捨てゝ、他に樂むべきいとなみあらずとなり○ふろかなる人といふとも云々。如何に愚智の人物なりとも、萬物の靈長たる人間に生れたからは、賢き犬に劣りて、大と捨て小と取るものあらんやとあり。

第百七十五段

世には心得ぬ事の多きかり。ともある時には、まつ酒をすゝめて、おひのませたるを興とすること、いかなるゆゑともてゝろえぎ。飲む人の顔、いとたへかたげに、眉をひそめ、人目をはかりてすてんとし、遁れんとするをとらへて、ひきとゞめて、すゞろにのませつれば、うるはしき人も、忽に狂人となりて、をてがましく、息災なる人も、目のまへに大事の病者となりて、前後も知らぎたふれふす。いはふべき日などは、淺ましかりぬべし。あくる日まで、頭いたく、物くはぎに、よひふし、生をへだてたるやうにして、昨日のこと覺えぎ。おほやけわたくしの大事をかきて、わづらひとある。人をしてかゝるめを見する事、慈悲もなく、禮義にもそむけり。かくからきめにあひたらん人、ねたく口をしと思はざらんや。人の國にかゝるならひあるかりと、これらになき人でとに傳へ聞きたらんは、

あやしく不思儀に覺えぬべし。

〔語解〕ともある時。何事がある時なり。友ある時と解するはよろしからず○いとたへがたげに眉をひろめ。無理に酒をすゝめらるゝにより、眉をひろめながら忍びて酒を飲むさまなり○すゞろに飲せつれば。漫りに飲せたればの意なり○とこかましく。物に拘ずと也○息災ある人。病氣故障のあらぬ人なり○いはふべき日。元服、移徙、五節句などの祝日と云ふ○生とへだてたるやうにして。宛かも死人の如くなりてあり○ふはやけわたくしの大事。公私の大事を云ふなり○おらきめ。辛苦の意なり。卽ち酒の爲に病氣となりて難義すると云ふなり○ねたく口とし。酒と強て飲せたる人と、妬く口惜く思はぬことなからんやとなり○これらにおき人ごと。我國に酒と飲ます習慣はなくて、異國にのみあるなりと聞き傳へたればなり。

〔文格〕うるはしき人も、たちまちに狂人となりて、とこがましく、」息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれ伏す」は、長疊法の粗格なり。

人のうへにてみたるだに心うし。思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、思ふ所なくわらひのゝしり、詞おほく、えぼうしゆがみ、ひもはづし、脛高くかゝげて、よういなき氣色、日ごろの人とも覺えぞ。女は額髮はれらかにかきやり、まゆからぞ、かほうちさゝげて、打わらひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、さ

かなとりて、口にさしあて、みづからもくひたるさまあし。てゐのかぎり出して、おの〳〵うたひ、年老いたる法師めし出されて、黑くきたなき身をかたぬぎて目もあてられぞすぢりたるを、興じ見る人さへうとましくにくし。あるは我の身いみじき事ども、かたはらいたくいひきかせ、あるは醉ひおきし下てざま人は、のりあひいざかひて、あさましくおそろしく、恥がましく、心うき事のみありて、はてはゆるさぬものどもおしとりて、緣よりおち、馬車より落ち又あやまちしつ。物にものらぬきはゝ、大路をよろぼひ行きて、築土、門の下などにむきて、えもいはぬことどもしちらし、年老い、袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつつ、よろめきたるいとかはゆし。かゝることをしても、此の世も後の世も、益あるべきわざならば、いかゞはせん。

〔語解〕人のうへにて見たるだに心うし。他人の上の事にて見たるさへ、心うきことなれば、自分に酒を飲みて醉ひたらばいかゞとあり○思ひ入たるさまに心にくしと見し人も。用意ふかく沈着らしく、格別の人品お見ゆる人もとなり○おもふところなく。思慮する所もなくとあり○えぼうしゆがみひもはづし。裝束のしどけなき樣と云ふなり○日ごろの人とも覺えず。平常格別

人品高き人と思ひしやうにも見えずとあり○女は額髪はれらのに云々。はれらかは、晴やかなり。是れ女の羞のしげならぬ躰なり○すぢりたる。禮儀ある行爲と云ふなり○我身いみじき事どものたはらいたくいひ聞せ。我が身をよしと自らほめて人に語るとなり○醉なきし。酒に醉ひたる結局、涙ぐみて悲しげに泣くといふなり。萬葉集に「のしこしといふ人よりも酒のみて ゐひなきするぞましてあるらし」とあり○のりあひ云々。罵詈して互に爭ひあふ事をいふなり○はては。ろのはて〳〵にはと也○ゆるさぬ物どもふしとりて。臺の物などと無理に奪ひ取りてあり○物にものらぬきはゝ。物は、乘物を云ふ。きとはゝ、分際の義なり○よろぼひ。酩酊してよろめくといふなり○築土。土と築きて立てたる塀をいふなり。○えもいはぬ事どもしちらし。嘔吐などする類と云ふなり○いとのはゆし。其愚極まりて、反て憐然なりと也○益あるべきわざならばいかゞはせん。酩酊して、のくの如き不行儀ある事となすも、今世後世の爲に益あらば、致方ならんとなり。

此の世には、あやまちおほく、財を失ひ、病をまうく。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそおこれ。憂をわすするといへど、酔ひたる人ぞ、過にしうさをも思ひ出でてなくめる。後の世は、人の智惠をうしおひ、善根をやくこと火のごとくして、惡をまし、萬の戒をやぶりて、地獄におつべし。酒をとりて人に飲せたる人、五百生が間、手なき者に生るとてそ、佛は說き給ふなれ。

〔解語〕 此の世にあやまちおほく。槃若論などに、酒に三十五の過ある事といへり○百藥の長。前漢書の食貨志に、夫れ鹽は食肴の將にして、酒は百藥の長なりとあり。淵明が雜詩に汎二此忘憂物一、注曰忘憂東方朔が傳に、憂を銷するものは酒に若くはなしとあり。○憂とわするといへど。物謂レ酒也ともあり○萬の戒をやぶりて。毘婆沙論に、有二鄔波索迦一、稟二性仁賢一、受二持五戒一、專一精不レ犯、後於二一時一、爲レ渴所レ逼、見二一器中一有レ酒如レ水、遂取飲レ之、爾レ時便犯二飲一酒戒一、時有二隣雞一來入二其舍一、盜殺而噉、復犯二殺與レ盜一戒一、隣女尋レ雞來入二其室一、强逼交通、復犯二邪行戒一、隣家告レ官訊一問、拒一諱復犯二誑一語戒一、如レ是五戒皆由レ酒犯、佛告二諸比丘一、汝等若稱レ佛爲レ師者、自レ今已往至二茅端所一、沾酒滴一、亦不レ得レ飲、などあるより來れり○佛は說き給ふなれ。梵網經心地門品に、若自一身手過二酒器一、與レ人飲レ酒者五百生無レ手、何況自飲とあると云へるこの。

かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨てがたき折もあるべし。月のよる、雪のあした、花の下にて、心のどかに物語して、盃出したる、萬の興をそふるわざなり。つれ〳〵なる日、思ひの外に友の入來て、とりおこなひたるも、心なぐさむ。なれ〳〵ゐからぬあたりの、御簾の中より、御くだものみきなど、よきやうなるけはひして、さし出されたるいとよし。冬せばき所にて、火にて物いりな

どして、へだてなきどちさしむかひて、おはくのみたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、御さかな何などいひて、芝の上にて飲たるもをかし。いたういたむ人の、しひられて少しのみたるも、いとよし。よき人のとりわきて、今ひとつ上すくるもしるど、の給はせたるもうれし。ちかづかまほしき人の上戸にて、ひしひしとなれぬる又うれし。さはいへど、上戸はをかしく罪ゆるさるゝ者なり。醉ひくたびれて、あさいしたる所を、あるじの引あけたるにまどひて、ほれたるかはながら、ほそきもとゞりさし出し、ものもきあへず、いだきもち、ひきをろひてにぐる、かいどりすがたのうしろ手、毛おひたる細脛のほど、をかしくつぎ〳〵し。

〔語解〕このくうしとふもふるのみれど。酒は此のやうにうとましと思ふ物なれども、月のよる。李白が月下に獨り酌める時の詩に、花間一壺酒。獨酌無二相親一。舉レ盃邀二明月一。對レ影成二三人一。とあるに思ひ合はすべし○雪のあした。謝惠連が雪の賦に、梁王遊二於兎園一。乃置二旨酒一。命二賓友一。とあるに思ひ合すべし。又王元寶毎二大雪一掃レ雪開レ徑迎レ客飲一宴謂二之暖寒會一。と云ふこと、天寶遺事に見ゆ○花の下。李白が宴二桃李園一序に、開二瓊筵一而坐レ花飛二羽一觴一而醉レ月といい。白樂天が、花下忘レ歸因二美景一。樽前勸レ醉是春風。と吟せしもあり○思の外に友の入來て。思ひのけるく朋友の來りてあり○なれ〳〵ぞ。このらぬあたり云々。宮中などの御簾の中より、御菓子、御酒など、奇麗にさし出されたるは、非常に上品ありとなり○へだてなきとち。親しき友達の義なり○いとどのし。爰にては甚面白き義と見るべし○御さのな何などいひて。肴にせむ物、何の有りたしなど云ひてなり○いたういたむ人云々。酒のむことと甚しく辭退する義あり○今ひとつ上すくなし。今ひとつ盃の數すくるしるど云ふ意と見るべし○ひしひしとなれぬる。酒宴上にて親しく馴れたる義と知るべし○上戸はとのしく云々。上戸は少しの不行義を爲すとも、罪ゆるさるゝあり。張安世は、郎官の醉て殿上と穢したるとゆるし。丙吉は、御吏の醉て丞相の車上に吐くと、醉飽の失と以て士をすつべのらずといひて、罪にせざりし類これなり○あさいしたる。朝寢したるなり○あるじの引きあけたるに。主人の起き出てゝ、戸隨子など引きあけたるにあり○ほれたるのはながら。ねぼけ顔ながらなり○ほろきもとゞりさし出し。結髮の亂れたるさまと云ふなり○ひきをろひてにぐる。ひきづりて退ぐるなり○のひどりすがたのうしろ手。下着のみたて帶をもせぬと、のいどりすがたと云ふ。うしろ手は、其うしろすがたなり。

第百七十六段

黑戸は、小松御門位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれ

ば、黒戸といふとぞ。

〔語解〕黒戸。清涼殿の北なる、瀧口の西にあり。○昔した〻人。御位に即き給はざりし以前、親王にておはしましける時を云ふなり○まさな事。正しからぬ事なり。即ち躬のら御料理などして聞しめす類なり。不正不義の事といふにあらず○常にいとなませ給ひける。御即位の後も、躬のら料理などいとなませ給へりとなり。

第百七十七段

鎌倉の中書王にて、御鞠ありけるに、雨ふりて後、いまだ庭のかわかざりければ、いかゝせんと沙汰ありけるに、佐々木隱岐、入道鋸の屑を車につみて、おほく奉りたれば、一庭にをかれて、泥土のわづらひなかりけり。とりためけん用意ありがたしと、人感じあへりけり。此の事をあるものゝかたり出でたりしに、吉田、中納言の乾砂の用意やはおかりけると、の給ひたりしかは、はづかしがりき。いみじと思ひける鋸のくづ、賤しくことやうの事なり。庭の儀を奉行する人、かわきすなどをまうくるは、故實ありとぞ。

〔語解〕鎌倉中書王。後嵯峨院第一皇子、一品中務卿宗尊親王の御事なり○佐々木隱岐、入道。佐々木隱岐の前司義清の嫡男、佐々木太郎左衛門政義のことなり○とりためけん用意。平常貯蓄し置きたる用意とあり○吉田中納言。万里小路從一位中納言藤房卿のことなるらんなと、句解に見えたり○いみじと思ひける鋸のくづ云々。用意周到なりと思へる、鋸の屑も、乾砂のまうけや無ありけるとのことと聞ては、賤しく異樣なりとなり。

第百七十八段

或所の侍ども、内侍所の御神樂を見て、人にかたるとて、寶劍をば、其の人ぞもち給へるなどいふを聞て、うちなる女房の中に、別殿の行幸には、晝御座の御劍にてこそあれと、忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

〔語解〕内侍所の御神樂。内侍所は、三種の神器の一なる神鏡を安置し給ふ所なり。其所に御神樂あるを見てなり○うちなる女房。是に兩義あり。一には、内とは禁裏の總號なるにより、内裏の女房と云ふとし、又一義には、只うのあたりの簾内の女房どものことなりとす。されど、こゝにては、禁裏の女房なりと知るべし○別殿。爰にては内侍所とさす。句解に、昔は御鏡と、夜の御殿の御帳の中、御枕の上に安置ありしに、今は内侍所にましますにより、別殿とはいへりとあり。○晝の座の御劍。句解に、御劍二ッあり、寶劍と神璽とは常に夜御殿の御帳中、御枕の上に安置す。壽永の亂に、寶劍入海の後、清涼殿の御劍と用ひらる。これ晝の御座の御劍なりとあり○典侍。内侍所の女官にして、供奉、奏請、宣傳の事など司どるなり。

第百七十九段

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安

置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。其のひじりの申されしは、那蘭陀寺は大門北むきなりと、江帥の說とて云ひ傳へたれど、西域傳法顯傳などにも見えぬ、更に所見なし。江帥は、いかなる才覺にてか申されけん覺束なし。唐土の西明寺は、北むき勿論なりと申しき。

〔語解〕首楞嚴經。一に中印度那蘭陀大道場經ともいひ、十卷あり○江帥の說。江帥は、正二位、太宰帥、美作守、權中納言大江匡房の事なり。この人、大宰帥なりし故に、江帥といひなせり。○西域傳。玄奘三藏が天竺へ渡行しての記錄なり。十二卷あり○法顯傳。法顯三藏渡天の記錄なり。

第百八十段

さぎちやうは、正月に打ちたるぎちやうを、眞言院より、神泉苑へ出して燒きあぐるなり。法成就の池にてそとはやすは、神泉苑の池をいふなり。

〔語解〕さぎちやう。三毬打。三毬杖。爆竹。左義長の文字と書く。季吟云く、三毬打と書く心はむかしは毬打三つとたて、作れりし故なり。今の爆竹三本と足に用ふるも其形見とうやと云へり○ぎちやう。毬杖なり○神泉苑。拾芥抄に、神泉苑は、天子遊覽の所なり。近衛次將と以て別當と爲す。乾臨閣之と正殿と謂ふ。金岡疊石あり。二條の南、大宮の西八町、三條の北、壬生の東にありと見ゆ。

第百八十一段

ふれ〳〵こゆき、たんぱのこ雪といふ事、よねつきふるひたるに似たれば、紛雪といふ。たまれ粉雪といふべきを、あやまりて、たんぱのとはいふなり。かきや、木のまたに、とうたふべしと、あるものしり申しき。昔よりいひける事にや。鳥羽院、をさおくおはしまして、雪のふるにかく仰せられけるよし、讃岐典侍の日記に書きたり。

〔語解〕よねつきふひるたるに似たれば。米搗き節ひたるに似たればなり。この詞、萬葉集中の歌にも見えたり。謝安は雪と鹽にたとへ。香山は玉屑に比し。王勉は豆稻灰にたとへし例あれば、米粉に喩へたる事、さもありぬべし○かきやゝ木のまたに。垣または樹木の岐なり○讃岐ノ典侍。堀河院の官女、源三位頼政の女なり。新勅撰集の作者にして、其日記三卷あり。

第百八十二段

四條ノ太納言隆親卿、からざけといふものを、供御に參らせたりけるを、かくあやしき物まるるやうあらじと、人の申しけるを聞きて、大納言鮭といふ魚、まるらぬことにてあらんにこそあれ。鮭のまらぼし、何條ことかあらん。鮎のまらぼしは、まるらぬかはと申されけり。

〔語解〕四條大納言隆親卿。正二位大納言隆衡卿の二男、正二位撿非違使の別當なり○供御。天皇陛下の御膳のことなり○鮭の乾らぼし何條事のあらん。生鮭は通常供御になし奉れば、乾

ちぼしのから鮭と奉りたりとて、何の子細もあるまじきとなり。

第百八十三段

人つく牛をば、角をきり、人くふ馬をば、耳をきりて、そのふるしとす。ふるしをつけずして、人をやぶらせぬるは、ぬしのとがなり。人くふ犬をば、やしなひかふべからず。是みなとがあり。律の禁なり。

〔語解〕 人とやぶらせぬる。人の身體を傷つけうこゝろひぬるはとあり○律の禁なり。これは法律の禁ずる所とあり。律脆牧に、凡ろ馬牛及ひ犬にして、人と觸觝踢咬するありて、而して記號栓繫法の如くせず、もし狂犬ありて、殺さざる者は、笞すること四十とあり。又疏に、雜合に依れば、畜産の人に觝る丶者は、兩角を截る。人と踏む者は、足を絆す。人と齧む者は、兩耳を截る。此れと標幟羈絆の法と爲すとあり。

第百八十四段

相模ノ守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さる丶事ありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀してきりまはりしつゝ、はられければ、せうとの城ノ介義景、其日のけいめいして候ひけるが、給はりて、なにがし男にはらせ候はん。さやうの事に、心得たる者に候ふと申されければ、其の男、尼が細工によもまさり侍らじとて、おほ一間づゝはられけるを、義景、皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだらに候ふも

見ぐるしくやと、かさねて申されければ、尼も、後はさはくゝと、張りかへんとおもへども、けふばかりは、わざとかくてあるべきあり。物は破れたる所はかりを、修理して用ふる事ぞと、わかき人に見習はせて、心づけんためありと申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約をもとゝす。女性なれども、聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を、子にもたれける、まことに、たゞ人にはあらざりけるとぞ。

〔語解〕 相摸ノ守時頼。時頼は、遠江ノ守、北條時政四代の孫にして、修理ノ亮時氏の二男なり○松下禪尼。修理ノ亮時氏の室にて、時頼、時定等の生母あり。實は秋田城ノ介景盛が女なり○守といれ申さる丶事ありけるに。禪尼の所へ、相摸守と請待せらる丶ことありけるにとなり○小刀して。小刀にてなり。○せうとの。兄弟の義なり○城ノ介義景。義景は秋田ノ城ノ介從五位ノ上景盛が長男にして、禪尼の兄あり○けいめい。經營の字を書く。いとなむ義あり。卽ち相摸ノ守時頼と請待する事と、經營すると云ふあり○給はりて。障子を張替へる役と仰せ給はりてあり○なにがし男。確乎と其名とさゝず、誰のにと云ふ意に通ふべし○まだらに候ふも見ぐるしく。所どころ切り張りすれば、其色ろろはずしてまだらなる故に見苦しきなり○儉約。何晏が曰く、去レ奢從レ約謂ニ之儉一○聖人の心にかよへり。聖人のなさる丶道に通ぜりとなり

第百八十五段

城陸奥ノ守泰盛は、さうあき馬のりなりけり。馬をひさいでさせけるに、足をそろへて、しきみをゆらりとこゆるを見ては、是はいさめる馬なりとて、鞍をおきかへさせけり。又足をのべて、ましきみに蹴あてぬれば、是は鈍くして、あやまちあるべしとて、のらざりけり。道をまらざらん人かばかり恐れなんや。

〔語解〕 城ノ陸奥ノ守泰盛。秋田城ノ介義景ノ三男、松下禪尼の甥なり。弘安年中に陸奥ノ守と兼任す。故に城の陸奥ノ守とは稱すなり○さうなき馬のり。無双の乘馬手なりとの義なり○しきみ。閾の字、又は閾の字と書く。門限なり○鞍とふきこのへさせけり。この馬は狂馬なりとて、他の馬に鞍と置のへさせたりとなり○道をまらざらむ人云々。此れ兼好の詞なり。其意は泰盛が馬道をこのく知りたるが故に、ふろれたるなり。其道と知らざる者ならば、このはどまでに、恐るまじとなり。

第百八十六段

吉田と申す、馬乘の申侍りしは、馬ごとにこはきものあり。人の力あらそふべからぞと志るべし。のるべき馬をば、まづよく見て、強き所、弱き所を知るべし。次に轡鞍の具にあやうき事あるを見て、心にかかる事あらば、其の馬をはすべからぞ。此用意を忘れざるを、馬乘とは申すなり。これ秘藏の事なりと申しき。

〔語解〕 馬ごとにこはきものなり。人の力あらろふべからす。鈍き馬とても、人の力よりは勝るものなれば、馬ごとに人よりは力強し。故に馬に乘るには、唯力まこのせにては、乘りこなし難きものと、知るべしとなり○其馬とはすべからず。はすは、駈騁の義なり。即ち逸足せしむべからずとなり○秘藏の事。他言すべからざる事なりとなり。

第百八十七段

萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にあらぶ時、かならぞまさる事は、たゆみなくつゝしみて、かろがろしくせぬと、ひとへに自由なるとの、ひとしからぬなり。藝能所作のみにあらぞ。大かたのふるまひ、心づかひも、おろかにしてつゝしめるは、得の本なり。たくみにしてはしきまゝなるは、失の本なり。

〔語解〕 萬の道の人。萬事藝能の道とたしなむ人とさす○不堪なりといへども。堪能ならずといへどもなり○非家の人。其藝道の家元に生れざる人と云ふ。○ふろのにしてつゝしめるは。性來愚鈍なるも、篤實なるはとなり。○たくみにしてはしきまゝ。性質怜悧なりとも、其行爲放姿なればとなり。故に人は、所作進退とつゝしみ、苟も非道不義の處爲となさぬやう、戒慎すべしとなり。

（文格） ふろろのにしてつゝしめるは云々、たくみにしてはしきまゝなるは云々」は、對句法

の精格なり。

第百八十八段

武者、子を法師になして、學問して、因果の理もあり、說經おどして、世わたるたづきともせよといひければ、をしへのまゝに、說經師にあらんために、まづ馬に乘りならひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬おどむかへにおこせたらんに、もゝじりにて落ちおんは、心うかるべしとおもひけり。次に佛事のち、酒おどすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじくおもふべしとて、早歌をいふ事を習ひけり。二のわざやう〳〵さかひに入れば、いよ〳〵よくしたく覺えて、嗜ける程に、說經あらふべきひまなくて、としよりにけり。

〔語解〕因果の理も云り。說文に曰く、因、託也、緣也、又𤞷ニ根ー本ー果與レ菓同凡有ニ不之根本ー者必結ニ其實ー因レ彼來レ此之謂也譬如ニ莖在ニ人、昨日盜ニ入之物ニ而今日遭レ害者昨是因而今卽果也。佛說にては、前世の業因にて、今世の果と結びたりと說く。故に因果の理とは、其原因結果の所因と分明する理と云ふなり○世わたるたづき。渡世の方便を云ふなり○導師に請ぜられん時。說經師及ひ引導師によばはれん時なり○檀那とは、佛道にては施主と云ふ義に通ず。そさまじく、面白からぬなり○早歌。今の端歌都々一の類なり○やう〳〵さのひに入れば。漸くにして、其藝の大力と知るに至りければなり。

此の法師のみにもあらず。世間の人、なべて此の事あり。わかき程は、諸事につけて身をたて、大なる道をも成じ、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらまほしてとゞめ、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、打ちおこたりつゝ、まづさしあたりたる、目の前の事のみにまぎれて、月日を送れば、てと〳〵なす事なくして身は老いぬ。つひに物の上手にもあらず、思ひしやうに身をもたもてとりかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに、おとろへ行く。

〔語解〕世間の人云々此の事あり。世間の人、道に志してゐながら、懈怠によりて、其の目的と遂げざる事ありとなり○能ともつき。藝能と修得して、其の身につける義なり○あらまほしてとゞも。豫め其事と成さんと思ひ定め置く事ともなり。○ことごとなす事おく。何の一事業ともなし遂ぐることおくしてゐり。○走りて坂をくだる輪の如く云々。老いむことの速なると云ふなり。天寶遺事下曰、張ー九ー齡每下與ニ賓客ー議ー論經ー旨滔ー々不レ盡如ニ下ー坡走ー丸也。

（文格）道とも成じ、能ともつき、學問をもせん」は、疊句法の精格、物の上手にもあらず、思ふやうにも身ともたず」ハ、對句法の粗格あり。

されば、一生のうちに、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひすてゝ、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事のきたらんなかに、すこしも益のまさらん事をいとなみて、其の外をばうち捨て、大事をいそくべきなり。何方をもすてじと、心にとりもちては、一事もおるべからぞ。

〔語解〕 むねとあらまほしからん事。我が主旨と欲せんとする事の義なり○何方をも捨てじと云々。見るもの、聞くもの、皆悉にとりて修めんと欲せは、結局一事も成就するものあるまじとなり。

（文格） 此の一章は、此の一段中の主眼なり。前後と通考して文勢の如何とも悟るべくあむ。

たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせぞ、人にさきだちて、小をすて、大につくがごとし。それにとりて、三のいしをすてゝ、十の石につく事はやすし。十をすてゝ、十一につく事はかたし。ひとつなりとも、まさらんかたへてそつくべきを、十までなりぬれば、をしくおぼゆて、多くまさらぬ石にはかへにくし。是をもすてぞ、彼をもとらんと思ふ心に、かれをも得ぞ、これをもうしなふべき道なり。

〔語解〕 小をすて大につくがごとし。碁法に、小をすて大につくと云ふことあり。人事も又此の如し。故に小事を捨て、大事をはげみつとむべきなり○彼をもとらんと思ふ心に云々。二兎を逐ふ者は、一兎をも得ずとの、諺語と思ひ合すべし。

〔文格〕 これをもそてず、これをも採らむ」これをも得ず、これをもうしなふ」は、いづれも疊句法の精格なり。

京にすむ人、いそぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きて、其の益、まさるべきことを思ひ得たらば、門より歸りて西山へゆくべきなり。こゝまできつきぬれば、此の事をばまづいひてん。日をさゝぬ事あれば、西山の事はかへりて、又こそ思ひたゝめと思ふゆゑに、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠とおる。是をおそるべし。

〔語解〕 門より歸りて西山へ行くべきなり。東山の門より立戻りて、西山へ行くべしとなり○日をさゝぬ事なれば。けふと其の日と確とさしのぎらぬ事とおれはなり。○一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。一時ぐらゐの怠りと思ふは、やがてこれ一生涯の懈怠とおるものぞとおり。

一事をかならゞ思はゞ、他の事のやぶるゝをも、いたむべからゞ。人のあざけりをも、耻べからゞ。萬事にかへゞしては、一の大事あるべからゞ。

〔語解〕 なさんと思はゞ。一大事と必ず成就せんと思ふたらばなり○人のあざけりとも耻づべからず。他人の嘲罵と耻お顧みずして爲すべしとなり。

〔文格〕 上の主眼の一章に照應したり。

人のあまたありける中にて、或者、ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふ事あり。わたのべのひじり、此の事を傳へ知りたりと語りけるを登蓮法師、其の座に侍りけるが聞きて、雨のふりけるに、簑かさやある。かし給へ。かのすゝきのこと習ひに、わたのべのひじりのがり、尋ねまからんといひけるを、あまりに物さわがし。雨やみてこそと、人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝものかな人の命は、雨のはれまをまつものかは、我も死に、聖もうせなば、尋ねきゝてんやとて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと、申傳へたるこそ、ゆゝしくありがたう覺ゆれ。敏き時は、則ち功ありとぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄を、いぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ、おもふべかりける。

〔語解〕 ますほのすゝき。まそほのすゝき。これ共に薄の穗の色にて、眞薄穗の薄、眞赭穗の薄と云ふ義なり。これは赭き穗と薄き穗との色を區分せる名義にすきず○わたのべのひじり。渡邊の聖なり。渡邊は、攝津の國にある地名なり。其處に住める聖僧といふことなり○登蓮法師。香法房とも云ふ。詞花、千載、新古今、新勅撰、續後撰等、すべて十一代集の作者あり○ひじりのがり。聖僧の許へとあり。○物さはがし。餘り火急にして物騷なりとの義なり○無下。前に云へり○人の命は雨のはれまをまつものゝは。人の命は朝夕とも知れず、今日明日とも分らざれば、雨の息むをまつものにあらずとなり○敏き時は則ち功ありとぞ。論語陽貨篇曰敏則有功。いふ意は、物ごと敏速にすれば、則ち其功見はるとなり○いぶかしく思ひけるやうに。うたがはしく、不審に思ひし人のやうにの義なり○一大事の因緣。法華方便品曰諸佛世尊唯以一大事因緣故出現于世。とあり。實相と一と爲し、廣博と大と爲す。佛、此と指して大事と爲すとなり。文句記に曰く、事とは不名理佛、此と以て人と化せんと欲す。故に大事と謂ふ。蓋し因緣とは、猶感應又は機緣と云はんが如しとあれど、茲はイハレ又はワケガラと解してありなむ。

〔文格〕 此の一章は、此の段の全部に照應して首尾とあせり。初章に於て、ある者子と法師となして云々と云ひ起し、登蓮法師の事實と引來りて、尾章と結べるが如きは、筆力の妙また思ふに餘あり。

第百八十九段

けふは、其の事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出來て、まぎれくらし、待つ

人は、さはりありて、たのめぬ人は來り、たのみたる方のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事は、ことなくて、やすかるべき事は、いとこゝろぐるし。日々に過ゆくさま、かねて思ひつるに似ぬ。一年の事もかくのごとし。一生の間も又おかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかとおもふに、おのづからたがはぬ事もあれば、いよ〳〵物は定がたし。不定と心得ぬるのみ、まことにてたがはぬ。

〔解語〕 あらぬいざきまづ出來て。ふもひかけぬ急用の出來てはとゐり○待つ人はさはりありて。ふのが待居る人は故障ありて來らずとゐり。陳后山が詩に、客有レ可レ人期不レ來とゐると同意なり○たのめぬ人。約束せぬ人といふなり○わづらはしのりつる事は云々。煩多なりと思ひつる事は、意外に易くすみ何事もなくてなり○やすのるべき事はいとこゝろぐるし。何の事もあるまじく、容易に思ひし事の慮外に容易ならずして、甚困難に心苦しとゐり○のねてのあらまし皆たがひゆくのとふもふに。兼好の歌に「あらましもきのふにけふはのはるのなおもひ定めぬ世にしすまへば」とあるに同じ意にて、豫定しふきたる事は、總体違ひ行くのと思ふのに也。

第百九十段

妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。いつもひとりゐみにてなど、きくこそ心にくけれ。誰がしが聟になりぬとも、又いかなる女をとりすゑて、相住など聞きつれば、無下に心おとりせらるゝわざなり。ことなる事なき女を、よしと思ひさだめてこそ、そひゐたらめど、賤くもおしはかられ、よき女ならば、此の男をこそらうたくして、あが佛とまもりゐたらめ。たとへば、さばかりにこそと覺ゆぬべし。まして、家のうちをおこなひをさめたる女、いとくちをし。子などいできて、かしづき愛したる心うし。男なくなりて後、尼になりてとしよりたるありさま、なき跡まで淺ましし。いかなる女なりとも、明暮そひ見んには、いと心づきなく、にくかりなん。女のためも、中空にこそならめ。よそながら時々通ひすまんこそ、年月へてもたゆぬなからひともならめ。あからさまにきてとまりゐなどせんは、めづらしかりぬべし。

〔語解〕 ひとりずみにてなど。若紫に、世に心のしまぬにやあらん。ひとり住にのみとあり。獨して居住することゐり○とりする。娶りての義なり○心おとり。心劣りにて、卑しげに思はるゝとなり。○ことなる事なき女。恒に心がはりせぬ女ゐり○此の男ところろうたくして。此の男ころと思ひこめば、愛敬してねぎらふとなり○あが佛とまもりゐたらめ。我が本尊として、大切に守るならめとなり。これ女の男と崇敬するを云ふゐり○たとへばさばゐりにころと

憂ぼえぬべし。ろれはどにころあらめと、人におしはゐられ思はれんとなり○かしづき愛した
る心うし。子と女のかしづく、其さまうるさく心うしとなり。後漢書ニ曰ク母ー愛子ー抱○いゐゐる
女。如何に容姿のうるはしき女ゐりともとなり○いと心づきなく。はなはだ氣付ゐぬにて、思
ひやりのゐき義なり○半空にこそゐらめ。女も明暮相住まんには、男に對して疎略にならんと
なり○たえぬなゐらひ。絶えぬ間柄の義と知るべし○あからさまにきてとまりゐゐどせんは。
明白地にその所へ來りて泊などせんはとの義なり。

第百九十一段

夜に入りて、ものゝはえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきらかざり、色
ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎ、およすげたる姿にてもありな
ん。夜はきらゝかに、花やかなるさうぞく、いとよし。人のけしきも、夜のほかげ
ぞよきはよく、ものいひたる聲も、くらくて聞きたる、用意ある心にくし。にほ
ひものゝ音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。さしてことゐる事なき夜、うち更
て、まゐる人のきよげなるさましたる、いとよし。わかきどち、心とゞめて見る
人は、時をもわかぬものなれば、ことにうちとけぬべき折ふしぞ、けはれおくひ
きつくろはまほしき。よき男の日暮れて、ゆするし、女も夜ふくるほどに、すべ
りつゝ鏡とりて、顏などつくろひ出づるこそをかしけれ。

〔語解〕夜に入りてものゝはえなしといふ人いとくちをし。はえは、映又は榮の字とあつ。花
のゆふばえといふも、是等の字と書けり。こゝの意は、夜に入りて光景なしと云ふ人あるは、口
惜く、ふびんなりと也○色ふし。物の色あひの義ゐり○ことろき。省略の義なり○およすげ。桐
壺に、およすけふはするとあると、源語類聚に、日本紀を引きて、助及と書くといへり。おとゐめ
きたる義ゐり○くらくて聞きたる用意ある心ゐくし。闇き所にて談話すると聞きたるに、前後を
氣遣ひて愼めるさまなるは心にくしとなり○わゐきどち。若年同士ゐり○時ともわゐぬものな
れば。晝夜の別もあるまじきものなればといふ義なり○けはれなく云々。けは、氣にて、なれた
る義ゐり。はれは、法禮にて、あらたまりたる義なり、故にけはれは、私公又は褻法禮と書くな
り。さて爰にては、若年同士の人達は、公私の別なく、平服禮服の差ゐく、常に其身とつくろひた
く思ふとなり○もするし。沐浴して作りゐざる義と知るべし○すべりつゝ。己の居間に入るこ
とゐり。又靜ゐに人去れず、退出する義にも通すべし。そべりはすべて貴人の前と去る事に用ふ
る語なり。

第百九十二段

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたるよし。

〔語解〕此段は、前後段の餘論なり、「にも」といふ字、よく〳〵こゝろにゐけて味ふべし○神佛
にも云々。人の參詣せぬ日は、至て物しづゐるゐれば、反て眞誠に參拜するにはよろしとなり。又は
夜まゐりするも、いと心地よしとなり。

第百九十三段

くらき人の、ひとをはかりて、其の智をしれりと思はん、更にあたるべからぞ。つたなき人の、碁うつ事ばかりに、さとくたくみなるは、かしこき人の、此の藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばぞと定めて、萬の道のたくみ、我が道を人のしらざるを見て、おのれすぐれたりと思はんこと、大なる誤りなるべし。文字の法師、暗證の禪師、たがひにはかりて、おのれにしかぞと思へる、共にあたらぞ。おのれが境界にあらざるものをば、あらそふべからぞ。是非すべからぞ。

〔語解〕くらき人。愚昧の人を云ふ○ひとをはかりて。他人の智能を推測してとなり○つたなき人。拙劣なる人と云ふ○さとくたくみなるは。敏鋭にして、而かも巧者なるはとなり○おのれすぐれりと思はんこと。己れの智に及はざらんと、みづから思ふことはとなり○文字の法師。經文のみを知りて、座禪工夫を知らぬ法師と云ふなり○暗證の禪師。座禪工夫のみを知りて、教相に通せぬものと云ふなり○おのれが境界にあらざるもの。自己が專門事業の範圍外の事とばなり。

第百九十四段

達人の人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからぞ。たとへば、或人の、世に虚言をかまへ出して、人をはかる事あらんに、すなはにまことゝ思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまりにふかく信をおこして、なほわづらはしく、虚言を心得そふる人あり。又何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝか覺束おくおぼえて、たのむにもあらぞ、たのまぞもあらで、案じゐたる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらんとて、やみぬる人もあり。又さまゞ〳〵に推し心得たるよしして、かしこげにうちうなづき、ほゝゑみてゐたれど、つや〳〵ゑらぬ人あり。又するし出してあはれさるめりと思ひながら、猶あやまりもこそあれと、あやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと、手をうちてわらふ人あり。又心得たれども、ゑれりともいはぞ、覺束なからぬは、とかくの事なく、ゑらぬ人とおなじやうにて、過る人あり。又此の虚言の本意をはじめより心得て、少しもあざむかぞ、かまへ出したる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中の戯だに、知りたる人の前にては、此さまゞ〳〵のえたる所、詞にても、顔にても、かくれなくゑられぬべし。まして、あきらかならん人の、まどへるわれらを見んこと、掌の上の物を見んがごとし。但し、かやうのおしはかりにて、佛法までをなぞらへいふべきにはあらぞ。

〔語解〕達人。物事の理に通達せし人と云ふ○虚言とうまへ出して。虚言を撰造し出してなり。

○人をはのる。人とたばのり詐はると云ふ○なほわづらはしく虚言と心得ろふる。一犬吠レ形万犬吠レ聲。一人傳レ虚万人傳レ實と云ふ如く、愚このなる者の佛神の奇瑞といへば、いよ〳〵とりろへて雪の上に霜と加ふるが如しと同一意なり○何としも思はで心とつけぬ云々。馬耳東風に、唯聞きゐがして注意せぬ人といふ意なり○ほゝゑみて。微笑するのたちなり○つや〳〵云々。一切知らぬの義なり○あはれさるめり。あはれは、天晴にて俗にあゝまあゐどの意なり。さるめりは、さもあるらんといふ意義なり○愚者の中に戯だに。上の虚言を構へ出して、人をたばのり詐はる事を云ふなり○但しのやうのふし量りにて云々。上に云へる如き推量にて、佛法までをも虚言にて、人とたばのりいつはるものと、思ふべのらずとなり。

第百九十五段

或人、久我縄手を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を、田の中の水におしひたして、懇ろにあらひけり。心得がたく見るほどに、狩衣の男、二三人出でて、こゝにおはしましけりとて、此の人を供していにけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

〔語解〕久我縄手。伏見の西、鳥羽の邊にありとぞ○大口。大口の袴のことといふ○久我内大臣。從一位内大臣通基公なり。公は、正二位大納言通忠公の嫡男なり○神妙にやんごとなき人。平常は殊勝におとなしく、實に貴き人にてありきとなり。然るに木造の地藏を田の中の水にて洗ふゐどとは、さても不思儀の事なり。發狂でもせらるまじきやとなり。

第百九十六段

東大寺の神輿、東寺のわか宮より歸座の時、源氏の公卿まゐられけるに、此の殿大將にて、さきをおはれけるを、土御門ノ相國社頭にて、警蹕いかゞ侍るべからんと申されければ、隨身のふるまひは、兵仗の家がする事に候かとばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、此の相國北山抄を見て、西宮の説とてそなられざりけれ、眷属の悪鬼悪神をおそるゝ故に、神社にて、ことにさきをれふべきことわり有りとぞ仰せられける。

〔語解〕東大寺。聖武天皇の御建立にて、南都七大寺の一なり○東寺。京都羅城門の東にあり て、延暦年中の建立にのゝる○此の殿。久我内大臣殿とさす○さきとおはれけると。大將の連られたる隨身にて、さきをおはせられたるあり○土御門ノ相國。正二位權大納言顯定卿の男、從一位太政大臣定雅卿の事といふ○社頭。頭はほとりの義なり○警蹕。先拂の警戒さする聲の事あり○兵仗の家がする事に候ふ云々。官階に文武の別あり。兵仗の家とは、武官の家といふ義なり。爰にては大將とさせり○西宮ノ左大臣高明公の作にのゝる、西宮記の説をさす。

第百九十七段

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふ事、延喜式に見えたり。すべて數さだまりたる公人の通號にてそ。

〔語解〕定額の女孺。定額は其數定まりたると云ふ。女孺は、內侍、藏侍、書司等の女官の下役にて、掃除の役ととるものゝ稱あり。其女孺の數員定まり居ること、猶昔諸國の寺の數と定めおのれ、又其寺々の僧正、僧都などの員數と定めおのれたるが如しとなり○公人の通號にころ。公儀の人の數の定まりたると、總べていふ名目にころあれとなり。

第百九十八段

揚名介にかぎらず、揚名目といふものあり。政事要畧にあり。

〔語解〕揚名介。源氏夕顏の卷にあり。名ばかり國の介になるといふ○揚名目。介のみに限らず、目代にも名目上の者ありとあり。職原抄に受領に諸國の守、介、掾、目とあり。爰に目とあるは卽ち其未官なり。

第百九十九段

橫川の行宣法印が申侍りしは、唐土は呂の國なり。律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なしと申しき。

〔語解〕呂の國なり。呂は高く强き音なり。唐人の音聲は、卽ち呂音なりの義なり○律の音なし。律は和にして正しきと云ふ。其音聲あらずとなり。

第二百段

吳竹は葉はそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿のかたにより て、うゑられたるは、吳竹なり。

〔語解〕吳竹。往古に吳國より渡來したるが故に、此ノ名ありとぞ○河竹　皮竹にて俗に篠竹のことなり○御溝。禁庭の溝と云ふ○仁壽殿。拾芥抄に仁壽殿は、禁裏南殿の北にあり。九間四面の御殿なりと見ゆ。

〔文格〕吳竹は葉はろく、河竹は葉ひろし」は、疊句法の精格なり。これらと世に對句といふは、いまだ此の二法格に委しからぬ故ありのし。

第二百一段

退凡下乘の卒都婆、外ゐるは下乘、內なるは退凡なり。

〔語解〕退凡。通常凡人と、山內に入らしめざるの義なり。下乘。馬車より下る義なり○卒都婆。塔なり。

第二百二段

十月をかみな月といひて、神事にはゞかるべきよしは、ゐるしたるものなし。本文に見えず。たゞし、當月諸社のまつりなき故に、此の名あるか。此の月よろづの神達、太神宮へあつまり給ふなどいふ說あれども、其の本說なし。さる事からは、伊勢にはことに祭月とすべきに、其の例もなし。十月諸社の行幸、其の例もおほし。たゞしおほくは不吉の例なり。

〔語解〕神事にはゞゐるべきよしは。神事を憚りて執り行はぬと云ふ義なり○しるしたるもの

るし。此の事と書き記したるものゐしとなり○當月。十月とさす○本説ゐし。たしかなる本據の説なしとなり○十月諸社の行幸其例もふはし。十月に、天皇の諸神社へ行幸せらるゝ、其例、いと多しとゐり。

第二百三段

勅勘の所に、靫かくる作法、今はたえて去れる人ゐし。主上の御惱、大方世の中のさわがしき時は、五條の天神に靫をかけらる。鞍馬にゆぎの明神といふも、靫かけられたりける神なり。看督長の負たる靫を、其の家にかけられぬれば、人いで入らぞ。此の事絶て後、今の世には、封をつくることにゐりにけり。

〔語解〕勅勘。勅は、天皇の臣下に對しての命令なり。勘は、鞫囚、卽ち勘當ゐり。故に勅勘は、天子の命令にろむきて勘當せらるゝと云ふ○靫のくる作法。靫は矢と入るゝ具にて箭室ゐり○看督長の負たる靫。職原抄に、檢非違此曰二使廳一本一所乃負靫廳也。當一使補二看督六十六人一此爲レ遣二諸國一也。とあるにて知るべし○人いで入らず。閉門の類なり○封とつくる事に成にけり。罪人の家には、闕所屋とて、財寶と官にとさめ、門戸に封とつくる事になれりとなり。

犯人を、去もとにて打つ時は、拷器によせてゆひつくるゐり。拷器の樣も、よする作法も、いまはわきまへ去れる人なしとぞ。

〔語解〕去もとにて。笞にてなり○拷器によせてゆひつくる。拷器は、犯罪人と拷問する器ゐり。ろれに罪人とよせて結び去ばるとゐり○いまはわきまへ去れる云々。兼好時代にては、罪人と拷問する器械の形狀や、それを以て去ばりつける作法とも。辨知する者ゐらずとなり。

第二百四段

比叡山に、大師勸請の起請といふ事は、慈惠僧正、書き初めたまひけるゐり。起請文といふ事、法曹には、その沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきて、おこなはるゝまつりごとはなきを、近代、此の事流布したるなり。又法令には、水火にけがれをたてぞ。入物にはけがれあるべし。

〔語解〕比叡山。山城近江の堺にあり○大師。大師は慈惠大師とさす○起請。平常の起請文といふ。神佛と勸請せむとしてするものゆゑ、勸請の起請といへるなり○法曹、法律命令とよく知りて沙汰する家なり。職原抄にあり○水火にけがれとたてず云々。句解に、天地の間、水火ゐきところなし。いづれとけがれとせん。其器物には、けがれあるべしとゐり。

第二百五段

德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて、使廳の評定おこなはれけるほどに、官人章兼が牛、はゐれて廳のうちへ入りて、大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれ打ちかみて臥したりけり。おもき怪異なりとて、牛を陰陽師の許へつかはすべきよし、おのおの申しけるを、父の相國きゝ給ひて、牛に分別なし。足あればいづくへかのぼらざらん。低弱の官人、たま〳〵出仕の微牛をとらる

べきやうなしとて、牛を主にかへして、臥したりけるたゝみをかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。あやしみを見てあやしまざる時は、あやしみかへりてやぶるとなり。

〔語解〕 德大寺右大臣殿。從一位太政大臣公孝公の、まだ、右大臣にてありける時のことなり○おこゐはれけるほど。評定と執行したる間にといふ義なり○大理の座。撿非違使別當の座なり○はまものの上。椅子の如くにして、高欄などあるものの上になり○にれ打ちゐみて。牛の咀嚼することといふ。「にれ」は齡の字ゐり○父の相國。公孝の父なる、太政大臣實基公のことと云ふ○庶弱。いやしくわゐき義なりと句解に見ゆ。卽ち章兼とさせるなり○微牛。微小ゐる牛といふ○あやしみと見て、あやしまざる時云々。千金方の黃帝雜忌咒に、見レ牲不レ牲其牲自壞とあるに同じ意なり。

第二百六段

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なるくちゐは、數もまらぜ、こりあつまりたる塚ありけり。此の所の神なりといひて、このよしを申しければ、如何あるべきと、勅問ありけるに、ふるくより、此の地をゐめたるものゐらば、左右なくほりすてられがたしと、皆人申されけるに、此の大臣ひとり、王土にをらん虫、皇居をたてられんに、ゐんのたゝりをかなすべき。鬼神はよこしまなしとがむべからぜ。たゞ皆ほりすつべしと、申されたりければ、塚をくづして、大井川にゐがしてけり。さらにたゝりゐかりけり。

〔語解〕 地とひゐれ。土地と引きならす義なり○くちなは。蛇と云ふ○こりあつまりたるりは、凝なり。多く一處により集り居ると云ふゐり○申されは。龜山院へ申し上げたればとなり○此地と宏め。此土地と卜居するものなればとゐり○左右ゐく。何のゐまひもなくとゐなじ義なり○此大臣公孝公の父、太政大臣實基公ゐり○王土にとらん虫。普天の下、率土の濱、皆王のものにゐらざるはなし。其の王土の中に生息する虫との意ゐり○鬼神はよこしまゐし。左傳莊が三十二年に、神聰明正直而一者也。とゐるに思ひ合はすべし。

第二百八段

經文ゐどの紐をゆふに、上下より、たすきにちがへて、二すぢの中より、わなのかしらを、よとさまにひきいだすことは、つねのことなり。さやうにしたるを、華嚴院の弘舜僧正、ときてなほさせけり。之は此の頃やうの事なり。いとにくし、うるはしくは、たゞくるくとまきて、上より下へわゐのさきを、さしはさむべしと申されけり。ふるき人にて、かやうの事、ぢれる人にゐん侍りける。

〔語解〕 いとにくし。甚見にくしとの義ゐり○ふるき人にて。弘舜僧正をさせるなり。

第二百七段

人の田を論ぜるもの、うたへにまけて、ねたさに、其の田をかりてとれとて、人を

つかはしけるに、先ッ道すがらの田をさへかりもてゆくを、是は論じ給ふ所にあらぬ。いかにかくはといひければ、かるものゞも、其の所とてもかるべきことわりおかれども、僻事せんとてまかるものなれば、いづくをか、からざらんとぞいひける。ことわり、いとをかしかりけり。

〔語解〕人の田と論ずるもの。人の所有の田と、我が所有なりと爭論するものとなり○うたへにまけて。訴訟にまけてあり○ねたさに。嫉くくやしさにと云義なり○僻事せんとてまかるものあれば云々。初めより僻事せんとて、來れるものあればとて、其論じまけたる田地へ行くべき道の其の傍らの田は何所でも苅らざらむとなり○ことはりいとをかしのりけり。其道理すでに理外にわたりて、いと笑ふに耐へたりとなり。

第二百九段

喚子鳥は、春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに、しるせるものなし。ある眞言書の中に、よぶこ鳥おく時、招魂の法をば行ふ次第あり。是は鵺おり。万葉集の長歌に、霞たつながき春日の、などつゞけたり。鵺鳥も喚子鳥のことざまに、かよひてきこゆ。

〔語解〕招魂の法。人魂の身体と離れ浮れ行くと、招返して体内に鎮むる秘法なり。これと眞言宗にて行ふとなり○鵺　怪鳥なり。

第二百十段

萬の事はたのむべからぬ。をろかなる人は、ふかく物を賴ゆゑに、怨み怒る事あり。いさはひありとて、賴むべからぬ。てわきもの先はろぶ。財多しとて賴むべからぬ。時の間に失ひやすし。才ありとて賴むべからぬ。孔子も時にあはぬ。德ありとて賴むべからぬ。顏回も不幸おりき。君の寵をもたのむべからぬ。誅をうくることすみやかなり。奴をたかへりとてたのむべからぬ。そむきはしる事あり。人の志をもたのむべからぬ。かゝらぬ變ぬ。約をも賴むべからぬ。信ある事すくなし。身をも人をもむのまざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみぬ。左右ひろければさはらぬ。前後とほければ塞がらぬ。せばき時はひしげくだく。心を用ふる事少しきにして、きびしきときは、物にさかひあらそひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せぬ。人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性なんぞことおらん。寬大にしてきはまらざる時は、喜怒是にさはらぬして、物のためにわづらはぬ。

〔語解〕おろかなる人は云々。愚昧なる人は、深くものと委賴する故に、たのみて其甲斐なき時は、怨み怒ることわりとなり○こはきもの先はろぶ。三略曰柔者德也。剛者賊也。又曰威多則身

驟。ろの講義に、威おほければ、即ち反て其身と陷る、此れ韓信黥布が終りと克くせざりしは、皆其威權多ゐりし所以なりとあり○才。才智なり○德。德行なり○奴。やつこたゐたのへりとて云々。平家物語に、三位中將重衡卿の馬たふれけるに、めのと、我馬とまゐらせずして遁げて、終に中將殿と、いけどらせしことある類とさすと、文段抄に見ゆ○せばき時はひしげくだく。心と狹くもちて、嚴格にそぐれは、喜怒之にふれて挫け碎くとなり○天地はゐざる所なし。宋の陸子靜が曰く、天地何所レ窮。又曰宇宙吾分-内事○ものゝためにわづらはず。萬物のために、心と煩はすことゐしとあり。

〔文格〕 此の一章、對句などの法格と用ひて、さま〳〵に文脈と通し、くさ〳〵に文勢と添へて書きなせり。注意して學びとるべくゐむ。

第二百十一段

秋の月は、かぎりなくめでたきものゐり。いつとても、月はかくてそあれとて、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべき事なり。

〔語解〕 ゐぎりなくめでたき。無限に愛すべきものなりと也○いつとても。春夏秋冬、いづれの季節とてもなり○思ひわゐざらん人。秋月と、春月、夏月、冬月の區別と、分明せざる人はとなり○無下に心うゐるべき事なり。秋の月の光景の、他の季節の月にまされるに、心ととめざる人は、物に無情なることとなり。

第二百十二段

御前の火爐に、火をおく時は、火ばししてはさむ事なし。かはらけよりたゞちにうつすべし。さればころびおちぬやうに心得て、炭をつむべきなり。八幡の御幸に供奉の人、淨衣をきて、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人、しろき物をきたる日は、火ばしを用ふるくるしからずと申されけり。

〔語解〕 御前の火爐。天子の御前の比多岐(火爐)を云ふなり○八幡の御幸。石清水の八幡宮へ御幸あらせ給ひける時にとなり○淨衣。白き裝束をさす○炭をさゝれ。炭をさしつぐ義と知るべし○有職の人。古實に明なる人を云ふなり。

第二百十三段

想夫戀といふ樂は、女男をこふるゆゑの名にはあらず。本は相府蓮、文字のかよへるなり、晉の王儉、大臣として、家に、はちすをうゑて愛せし時の樂なり。大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とて、夷のこはき國あり。其の夷、漢に伏して後に來りて、おのれが國の樂を奏せしなり。

〔語解〕 想夫戀。句解にさうふれんを、想夫戀と書くは誤なり。然るに源平盛衰記に、仲國が嵯峨の法輪へ、小督局を尋ねて其琴をきくに、夫を想ふて戀ふとよむ、想夫戀といふ樂なりとあり。此義あしきなり。白氏文集の六十八に、想夫憐の詩あり。夫憐といふ時は、夫憐を想ひてと書き傳へたるにや。憐をあやまりて戀となせりとあり。爰に兼好其義をたゞせるなり○文字のかよ

へるなり。相府蓮と、想夫戀と、解聲相ひ通ずるが故なりとなり○廻忽云々。これも廻鶻といふを正とすべしとなり○漢に伏して。漢國に歸伏しての義なり○奏せしなり。其の樂を奏して聞かせ奉れるなり。

第二百十四段

平宣時朝臣老の後、むかしがたりに、最明寺入道、あるよひの間に、よばるゝことありしに、やがてと申しながら、直垂のなくて、とかくせしほどに、又、使來りて、直垂などのさぶらはぬにや。夜なればことやうなりとも、とくとありしかば、なゑたる直垂、うちうちのまゝにて罷りたりしに、銚子にかはらけそへて、もていでゝ、此の酒をひとりたうべんが、さうぐしければ申しつるなり。さかなこそ無けれ。人はしつまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも、もとめ給へと有りしかば、しそくさして、くまぐを求めし程に、臺所の棚に、小土器にみその少しつきたるを見出でて、これぞもとめえてさぶらふと申ししかば、事たりなんとて、心よく數献におよびて、興にいられ侍りき。其世にはかくこそ侍しかと申されき。

〔語解〕平宣時朝臣。北條五郎時忠、後に宣時と改む。大佛陸奥ノ守の事なり○最明寺入道。北條時頼の事なり○やがてと申ながら。宣時が頓て參るべしと、最明寺入道の使へ、返事申しながらなり○ことやうなりとも。異なりたる裝束にてもなり。卽ち平常のまゝにてよろしとなり○なへたる直垂云々。着舊しゝ直垂或は常着のまゝなりとも宜しとなり○たうべんがさう〳〵しければ。獨酌するがさびしければなり○なづまりぬらん。寢なづまりぬべしとなり○しろくさして。紙燭をさしとぼしてなり○くまぐ。臺所の隈々と云ふなり。

第二百十五段

最明寺入道、鶴岡の社參のついでに、足利左馬ノ入道の許へ、まづ使ひをつかはして、立いられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一献にうちあはび、二献にえび、三献にかいもちひにてやみぬ。其座には、亭主夫婦、隆辨僧正、あるじ方の人にて座せられけり。さて年ごとに給はる、足利の染物、心もとなく候ふと申されければ、用意しさぶらふとて、色〻の染物三十、前にて女房どもに、小袖に調せさせて、後につかはされけり。其の時みたる人の、ちかくまで侍りしが語り侍りしなり。

〔語解〕最明寺入道。北條時頼の事なり○足利左馬ノ入道。法名は正義。俗名は義氏。從四位下。法樂寺と號す。足利義兼の子、母は北條時政の女なり○あるじ設けられ。饗應なり○うちあはび。熨斗鮑なり○隆辨僧正。鶴岡の別當なり。將軍宗尊、御不例の時、祈禱加持と致し、効

驗ありしに依て、恩賞として美濃ノ國岩瀧の郷を拜領し、僧正に任せらるゝと、吾妻鏡に見えたり○前にて。左馬入道の御前にてなり○女房。爰にては女工の義と解すべし○調せさせて。縫調へさせてと云ふ義なり。

第二百十六段

ある大福長者の云はく。人は萬をさしおきて、ひたぶるに、德をつぐべきなり。まづしくては、いけるかひなし。富めるのみを人とす。德をつかんと思はゞすべからく、まづ、其の心づかひを修行すべし。其の心づかひは、他のことにあらず。人間常住のおもひに住して、かりにも無常を觀ずる事なかれ。是第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲にしたがひて、志をとけんと思はゞ、百万の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願はやむときなし。財はつくる期あり。限ある財をもちて、かぎりなき願にしたがふ事得べからず。所願心にまかす事あらば、我をほろぼすべき惡念きたれりと、かたくつゝしみおそれて、小用をもなすべからず。次に錢を奴のごとくして、つかひもちふるものとしらば、ながく貧苦をまぬかるべからず。君のごとく、神のごとく、おそれたふとみて、したがへもちふることなかれ。次に恥にのぞむといふとも、怒りうらむる事かれ。次に正直にして、約をかたくすべし。此の義をまもりて、利をもとめん人は、富の來るとつきざる時は、宴飲聲色をこと〻せず、居所をかざらず、所願を成せざれども、心とこしなへにやすくたのしきと申ためき。

〔語解〕 大福長者。財と積むこと鉅万なる富豪の者と云ふ○ひたぶるに德とつくべきなり。只管に利德とつくべしとなり○人間常住の思ひに住して云々。人間は將來長く生存するものと思ひ定めて、決して風前の燈火の如く、無常きはまるものなるゝ思ふべからずとなり○かぎりなき願に云たがふ事得べからず。莊子の養生主曰、吾生也、有レ涯而知也無レ涯、以レ有レ涯隨レ無レ涯殆已、と云ふに思ひ合はすべし○約とこたくすべし。約束と堅く履行すべしとなり○此義。以上に掲げたる金錢に關する義なり○火のこわけるにつき水のくだれるに云たがふがごとくなるべし。易の乾の卦に曰く、水は濕へるに流れ、火は燥けるに就くとあり。其事の容易なる義なり○宴飲聲色。宴飲は飲食と張る宴樂といひ、聲色は音樂と女色とをさすなり。仲虺之語曰惟王不レ邇二聲色一。又長恨歌傳に、玄宗深二居遊宴一。以二聲色一自娛とあり○たのしと申しき。此れまでは大福長者の言葉なり。

〔文格〕火のこのわけるにつき、水のくだれるに從ふ」は、疊句法の精格あり。次章の所願あれどもかゐへず、錢あれども用ひざらむ」も同格あり。

第二百十七段

抑人は、所願を成せんがために財をもとむ。錢をたからとする事は、願をかなふるがゆゑなり。所願あれどもかゐへず、錢あれどももちひざらむは、全く貧者と同じ。何をか樂とせん。此たきては、たゞ人間の望をたちて、貧をうれふべからぬと聞えたり。欲をなして、たのしびとせんよりは、ゐかじ。財なからんには、癰疽をやむもの、水に洗ひて樂とせんよりは、やまざらんにはゐかじ。こゝにいたりて、貧富わくところなし。究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり。

〔語解〕抑。是より兼好が論なり○癰疽。癰疽共に腫物の病名あり。癰者大而高起屬二乎陽一六府之氣所レ生也。疽者平而内發屬二乎陰一五藏之氣所レ成也と醫書に見えたり○貧富わく所なし。貧富と區別する所あらずとなり○究竟は理即にひとし。句解に、天台家に六即あり。理即、名字即、觀行即、相似即、分身即、究竟即、是れなり。理即は、佛法の名字と知らぬ、薄地底下の凡夫、乃ち畜類に到るまで、皆佛性を具するをいふ。名字即は、佛法といふ名と知りたるなり。觀行即は、座禪修行するなり。相似即は、佛菩薩の行にちづくに似たるなり。分身即は、菩薩の位にて衆生濟度の爲に變現するなり。究竟即は、妙覺の位如來地あり。されば佛も本は凡夫なり。一切の凡夫狗子の類まで、悉皆佛性あると究竟は理即にひとしといへり。悟了、同未悟といふも、この義ありと見えたり。

（文格）究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり」は、對句法の精格なり。

第二百十八段

狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて、舍人がねたる足を、狐にくはる。仁和寺にて、夜、本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかゝりて、くひつきければ、刀をぬきてこれをふせぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつきころしぬ。二はにげぬ。法師はあまた所くはれゐながら、ことゆゑなかりけり。

〔語解〕堀川殿。久我の一門、太政大臣基具公なり。堀川と號す○舍人。爰にては牛飼馬飼人の義と知るべし○本寺。壽云く、本寺とは今の仁和寺より北の方に野あり。本寺の舊跡たる故にや。今も本寺野と號す。龍安寺より嵯峨へゆくに、龍安寺の少し西の方にある野と、本寺の馬場といへり。此所なり。又句解には、本寺とは仁和寺といふべしともあり○ことゆゑなりい。傷と被りたれども、死ぬる程にはあらざりきとなり。

第二百十九段

四條黃門、命せられて云はく、龍枕は道にとりては、やんごとなきものなり。先日來りて云はく。短慮のいたり、きはめて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、いさゝかいぶかしき所の侍るかと、ひそかに是を存ず。其の故は干の穴は平調、

五の穴は下無調あり。其の間に勝絶調をへたてたり。上の穴双調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調なり。其の次に鸞鏡調をおきて、中の穴、盤渉調、中と六とのあはいに神仙調あり。かやうに間々に皆一律をぬすめるに、五の穴のみ、上の間に調子をもたゞして、ゑかも間をくばる事ひとしき故に、其の聲不快なり。されば此の穴をふくときは、かならゞそのく。のけあへぬ時は、ものにあらゞゞ。吹うる人、かたしと申しき 料簡のいたり誠に興あり。先達、後生をおそるといふこと、此の事なりと侍りき。

他日に景茂が申侍りしは、笙はしらべおほせてもちたれば、たゞふくばかりゑり。笛はふきゑがら、いきのうちにて、かつゑらべてもてゆくものなれば、穴でとに、口傳の上に性骨をくはへて、心をいるゝ事、五の穴のみにかぎらゞゞ。ひとへにのくとばかりも定むべからゞゞ。あしくふけば、いづれの穴も、こゝろよからゞゞ。上手はいづれをも吹きあはす。呂律の物にかなはざるは、人のとがなり。器の失にあらゞゞと申しき。

〔語解〕 四條黄門。四條は稱號、黄門は中納言なり。此人笙笛の名人にてあはせしとなり○命せられて云く。四條黄門の、兼好に仰せられて云はくゑり○龍秋は道にとりて。龍秋は時の樂人の名なり。道にとりては、音樂の道にとりてなり○短慮のいたり云々。短慮とは、遠慮ゑき事と云ふ謙遜の詞なり○荒涼は不興の意なり○いぶのしき。不審の義なり○のやうの間々に一律とぬすめるは。律とは音律とて調子の事と云ふ。穴ごとの調子の間に、みな一調子づゝと、へだてたるはとゑり○不快なり。こゝろよからずと解すべし○此の穴と。五つの穴とさす○のゑらずのく。笛とふく時に、口ともち直す心と知るべし○のたし。ゑり難しとなり○料簡のいたり。龍秋が、道理とはゑりて述べられたる詞に、感服して云はれたる詞なり○景茂。此人は笛吹地下の樂人にて、大神氏が事ゑり○笙はしらべおほせて。北村季吟翁云く、笙は管ふほしといへども一つ〳〵、よく調子とあはせおけば、吹くにさのみ子細ゑしとなり○性骨。天性其骨とろなへたる器用と云ふ○呂律の物にかなはざるは。呂律は調子の義なり。調子の物にあはざるは、その器物のつみにあらずして、此とふく人のとがゞとなり。説文曰律均布也。十二律均布節氣也。字彙曰呂陰律名。呂旅也。言陰氣旅助陽氣也。

第二百二十段

何事も邊土は、賤くかたくなゝれども、天王寺の舞樂のみ、都に耻ゞといへば、天王寺の伶人の申侍りしは、當寺の樂は、よく圖をしらべあはせて、ものゝ音の、めでたくとゝのほり侍る事、外よりもすぐれたり。故は、太子の御時の圖、今に侍るを、はかせとす。いはゆる、六時堂の前の鐘なり。其の聲、黄鐘調のもゑか

あり。寒暑にまたがひて、あがりさがりあるべき故に、二月涅槃會より、聖靈會までの中間を指南とす。秘藏の事あり。此の一調子をもちて、いづれの聲をもとゝのへ侍るなりと申しき。およそ鐘の聲は、黃鐘調なるべし。是レ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黃鐘調にいらるべしとて、あまた度、いかへられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづねいだされけり。法金剛院の鐘の聲、また黃鐘調なり。

〔語解〕 天王寺。攝津ノ國大阪にあり。推古天皇の御宇、聖德太子の建て給ふものあり○伶人。黃帝の世、伶倫といふ者、初めて音樂を作る故に、樂人と一に伶人といふ○當寺。天王寺と云ふあり○故は。外よりも優れる其の故はなり○はこのせとす。定規とすといふ義あり○六時堂。天王寺境内にあり。朝夕六つの行をつとむ所の前にある鐘堂なり○もなの。最中あり、俗に「マンナカ」と云ふに同じ○あがりさがり。冬夏に從りて鐘聲の强弱すると云ふなり○聖靈會。聖德太子の忌日、二月廿二日なり○指南。指南車の故事より起りたる語にして、手本とする義に用ふ○黃鐘調。春秋に曰く、黃帝伶倫に命して律を爲らしむ。伶倫十二筒を制して鳳鳥の鳴を聽く。以て十二律を別ち、以て黃鐘の宮に比す、故に黃鐘は宮律の本なり○祇園精舍。天笠の祇園のことにて、精舍は佛閣をさす、句解に舍衛國の民、邪惡の風、盛ある故に、須達長者、精舍を營み、佛を請して佛理をきゝしめんため、祇陀太子の園を請ふて、精舍を立て、是を祇園精舍と名付くと、經律異相と見えたりと記せり○西園寺。拾芥抄に曰く、衣笠の長に方り、太政大臣公經公の家邸にあり○法金剛院。山城ノ國葛野郡太秦の東に其舊跡ありとぞ。

第二百二十一段

建治弘安の頃は、祭の日の、放免のつけ物に、ことやうなる紺の布、四五端にて馬をつくりて、尾髮にはとうじみをして、蜘の井かきたる水干につけて、歌の心おぼいひて、わたりし事、つねに見及び侍りしなども、興ありてきたるこゝろにてこそ侍しかと、老たる道志どもの、今日もかたり侍るあり。此の頃はつけものの年を送りて、過差ことの外になりて、萬のおもき物を多くつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからはほこをだにもたぞ、いきつきくるしむ有樣、いと見ぐるし。

〔語解〕 祭の日。加茂祭の日なり○放免のつけ物。放免は加茂の祭日にのぎり、罪人と放免して、これと供に召連れると云ふなり○蜘の井云々。蜘の井にあれたる駒はつゐぐとも二道のくる人はたのまじ」の古歌の心あり○道志どもの。職原抄に、凡ろ志は使廳の諸公事と奉行するが故に、當道と以て其撰となる。此と道志と號すとあり。卽ち右衛門左衛門の志と道志といふあり○過差ことのほのに。過分の華麗となすと云ふなり。

第二百二十二段

竹谷、乘願房、東二條院へまゐられたりけるに、亡者の追善には、何事が勝利おはさと尋ねさせ給ひげれば、光明眞言、寶篋印陀羅尼と申されたりけるを、弟子ども、いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛にまさる事さぶらふまじとは、など申し給はぬぞと申しければ、我宗なれば、さてこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して、巨益あるべしと說る經文を見およばねば、何にみえたるぞと、かさねてとはせ給はゞ、いかゞ申さんと思ひて、本經のたしかなるにつきて、此の眞言、陀羅尼をば申しつるなりとぞ申されける。

〔語解〕竹谷、乘願房。竹谷は地名あり。乘願房がこと淨土宗の名僧なるよし、沙石集に見えたり○勝利。すくれたる利益といふ義なり○光明眞言寶篋印陀羅尼。光明眞言は、絹索經にいはゆたる語なりとぞ。寶篋印陀羅は、經文の名稱なり○稱名。彌陀の名號を稱する義にして、念佛の事なり○巨益。大なる利益の義と知るべし○本經。こは不空羅索經と云ふなり。

第二百二十三段

たつのおはいどのは、童名たづ君なり。鶴をかひ給ひけるゆゑにと申すは、僻事なり。

〔語解〕たつのおはいどの。井蛙抄に、たつのおはいどのは、後京極良經公の男、九條前內府基家公なり。鶴殿と號し、又砂金大臣殿と號すとあり○僻事。正しき說にあらずとなり。

第二百二十四段

陰陽師、有宗入道、鎌倉よりのぼりて、たづねまうできたりしが、まづさし入りて、此の庭のいたづらに、ひろきこと、淺ましくあるべからぬ事なり。道をなるものは、うゝることをつとむ。はそ道ひとつ殘して、皆、はたけにつくり給へと、いさめ侍りき。まことにもこしの地をも、いたづらにおかん事は、益なき事なり。食物、藥種などうゑおくべし。

〔語解〕有宗入道。安倍晴明十五代の孫、有重が子なり。陰陽ノ頭なり○うゝることとつとむ。植ゑることと勤むとなり。論語、憲問ノ篇に、禹稷躬稼而有二天下一。とあり。

第二百二十五段

多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に、興ある事どもを、ゐらびて、磯の禪師といひける女に、をしへてまはせけり。ゐろき水干に、さうまきをさゝせ、烏帽子を引入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、此の藝をつげり。是白拍子の根源なり。佛神の本緣をうたふ。其の後、源ノ平行おはくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊にをしへさせ給ひけるとぞ。

〔語解〕多久資。樂人なり○通憲入道。少納言正五位ノ下日向ノ守信西入道の事なり○磯の禪師

源義經の妾、靜が母なり○さうまき。さやまきの義にて、太刀の裝作なり○神佛の本緣。神佛の根本緣起なり○龜菊。後鳥羽院に奉仕せし舞女なり。其の事跡は吾妻鏡に見えたり。

第二百二十六段

後鳥羽院の御時、信濃前司行長、稽古のほまれありけるが、樂府の御論議の番にめされて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問をすてゝ遁世したりけるを、慈鎭和尙、一藝ある者をは、下部までもめしおきて、不便にせさせ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此の行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて、かたらせけり。さて山門のことを、ことにゆゝしくかけり。九郎判官の事は、くはしく知りて書きのせたり。蒲冠者の事は、よくしらざりけるにや。おほくの事どもを、忘るしらせり。武士の事、弓馬のわざハ、生佛、東國のものにて、武士にとひ聞きてかゝせけり。彼の生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるあり。

〔語解〕 此段は、平家物語の作者とあらはして、人に知らしめたるなり○稽古のほまれありけるが。音樂の古事とよく稽へ知れると云ふ○樂府の御論議の番。樂府は、白氏文集中にあ新樂府あり。御論議は、文集の樂府の中の不審を問答する事と云ふ。番は「ツガフ」と讀み、學者をあたわけて、其の義を論せしむる人數に、めさるゝと番に召さるといふるべしと、文段抄に見ゆ○七德の舞。白氏文集に、太宗爲二秦王一破二劉武周一軍中相與作二秦王破陳樂曲一及レ卽レ位宴會必奏レ之以二百廿八人一被二銀甲一執レ戟而舞凡三變每變爲二四陳一象二擊刺往來一後更名二七德舞一とあり○慈鎭和尙。天台座主なり○九郎判官。源九郎義經の事あり○蒲冠者。從五位下三河守源範頼の事あり○彼の生佛が生れつきの聲。東國なまりなる生つき强き音聲となり。

第二百二十七段

六時禮讃は、法然上人の弟子、安樂といひける僧、經文をあつめて作りてつとめにしけり。其の後、太秦ノ善觀房といふ僧、ふしはかせを定て、聲明にあせり。一念の念佛の最初あり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讃も、同じく善觀房はじめたるなり。

〔語解〕 六時禮讃。晝夜の六時に彌陀佛に禮拜する和讃の名稱あり○太秦ノ善觀房。太秦は元來、秦氏の建立にあるべれば此名あり。廣隆寺の事なり○ふしはかせ。其の節の調子を定めての義と見るべし○法事讃。佛菩の名上下二卷あり。

第二百二十八段

千本の釋迦念佛は、文永の頃、如輪上人、是をはじめられけり。

〔語解〕 千本の釋迦念佛。千本は地名にて洛地にありとぞ○文永。龜山天皇の御宇の年號あり

○如輪上人。法然上人の孫弟子にて、澄空上人ありとの說なれど、傳記あらぬと以て詳に知り難

第二百二十九段

よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙觀がかたなは、いたくたゝぎ。

〔語解〕にぶき刀とつかふ。鈍刀と以て細工するとなり○妙觀。攝津國勝尾寺の講堂の觀音像と刻みたる比丘なり。詳しくは、元享釋書に就て見るべし○いたくたゝず。甚、きれざりきとなり。

第二百三十段

五條の內裏には、妖物ありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは、殿上人ども、黑戸にて碁をうちけるに、御簾をかゝげて、見るものあり。たぞと見むされば、狐、人のやうに、つひゐてさしのぞきたるを、あれ狐よと、どよまれてまどひにげにけり。未練の狐、ばけそんじけるにこそ。

〔語解〕五條の內裏。後白河天皇の御宇、五條の里內裏と云ふなり○藤大納言殿。藤原爲世卿なりと句解に見ゆ○たぞ。誰ぞとなり○どよまれて。大聲とわゞる事にて俗に「ドナラレテ」と云ふに同じ○未練の狐。爰にては年劫と經ぬ狐ぞと云ふ義に解すべし。

（文格）此の段の結尾のこうの下には、あらめの含語ありて、係結法第三格となすなり。

第二百三十一段

園ノ別當入道は、さうなき庖丁者なり。或人のもとにて、ひみじき鯉をいたしたりければ皆、人別當入道の庖丁を、見ばやと思へども、たやすくうちいでんも、いかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、此の程、百日の鯉をきり侍るを、今日かき侍るべきにあらず、まげて申請んとて、きられける、いみじくつぎ〳〵しく興ありて、人ども思へりけるとぞ、ある人、北山ノ太政入道殿に、かたり申されたりければ、かやうの事、おのれはよにうるさく覺ゆるあり。きりぬべき人なくばたべ、さらんといひたらんは、なほよかりなん。何條百日の鯉をきらんぞとの給ひたりし。をかしくおぼゆるし、人のかたり給ひける、いとをかし。

〔語解〕園ノ別當入道。園は稱號あり。別當は檢非使ノ別當に任せられしもあるあり。實は正三位參議基氏卿あり○庖丁者。丁氏よく庖厨の事を知りて宰烹する故に、庖丁と云ふありと、文段抄に見えたり○ためらひ。猶豫あり○百日の鯉。もの〻稽古に、百日行とする類なるべしと、季吟翁は云へり。卽ち鯉と料理する仕方と百日怠らぬ事あり○つぎ〳〵しく。首尾よくあり○北山太政入道殿。西園寺公經公の事なり○おのれはのやうの事よにうるさく。よには、餘に云とふと、世ふと云ふの兩義あり。

大方ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるがまさりたる事なり。まれ人の饗應なども、ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、た

ゞそのことゝなくてとり出でたるいとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくてこれを奉らんといひたる、まことの志なり。をしむよしをして、こはれんとおもひ、勝負のまけわざに、ことつけなどしたるむづかし。

〔語解〕大方。これよりは兼好の評語なり○ふるまひて興あるよりも云々。いろ〳〵と振舞て苦興味をつくるよりは、興味ゐくても無事なる方まされりとなり○まれ人の饗應。まれ人は客なり、客人に饗應するなどはなり○ついでとのしきやう。其の首尾の次第面白きやうになす義なり○ことつけ。或事にゐこつけてとなり。

第二百三十二段

すべて人は、無智無能なるべきものなり。ある人の子の見ざまなどあしからぬが、父の前にて、人と物いふとて、史書の文をひきたりし、さかしくはきこえしかども、尊者の前にては、さらぬとおぼえしなり。

〔語解〕史書。史記漢書又は經書などの書籍の文と引證して語るゐり○尊者の前にては師父などすべて目上の尊敬すべき人とさすなり○さらずとも。左樣にあらずともなり。

、ある人の許にて、琵琶法師の物語をきかんとて琵琶をめしよせたるに、ぢうのひとつおちたりしかば、作りてつけよといふに、ある男の中に、あしからぬを見ゆるが、古きひさくの柄ありやなどいふを見れば、爪をおふしたり。琵琶などひくにてそ、めくら法師の琵琶は、其の沙汰にも及ばぬことなり。道に心得たるよしにやと、かたはらいたかりき。ひさくの柄は、ひものの木とかやいひて、よからぬものにとぞ、ある人仰せられし。わかき人は、すこしの事もよく見え、わろく見ゆるなり。

〔語解〕琵琶法師の物語。平家物語と云ふなり○ぢう。柱なり、琵琶にては「ぢう」とよみ、琴にては「ことぢ」と訓むなり、ろも琵琶の柱は五つゐり○ふるきひさく。古き檜の柄杓と云ふ○爪とふふしたり。爪と長く生したりとなり○ひも木。檜物師のつゐふ白木の義なり○よからぬものにぞ。柄杓の柄は柱にはよからぬものなりとの義なり。

（文格）よからぬものにとぞ、にの下にありの含語と加へ、さてぞは仰せられしにて、係結法第二格と調ふるゐり。

第二百三十三段

よろづのとがあらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかき、うや〳〵しく言葉すくなからんにはをかし。男女老少、みなさる人こそよけれども、ことにわかくかたちよき人の、ことうるはしきは忘れがたく、思ひつかるゝものおり。萬のとがは、なれたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をおいがしろにするにあり。

〔語解〕人とわのず。貴賤老少貧富と論じ分たずしてなり○さる人ころ云々。左欄の人ころ宜しけれとあり○所えたるけしき。物事に馴れたる氣色なり○人とあいがしろに云々。傍若無人の振舞となとと云ふ。

第二百三十四段

人の物を問たるに、さらぬしもあらじ。ありのまゝにいはんは、をこがましとにや。心まどはすやうにかへりごとしたる、よからぬ事なり。さりたることも、猶さだかにと思ひてや問らん。又まことにさらぬ人も、などかなからん。うらゝかにいひきかせたらんは、おとおしく聞えなまし。人はいまだ聞及ばぬ事を、わがしりたるまゝに、さても其の人のことの、淺ましさなどばかりいひやりたれば、いかおることのあるにかと、おし返しとひにやるこそ、心つきなけれ。世にふりぬることをも、おのづから聞きもらすこともあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらん、あしかるべき事かは。かやうの事は、ものおれぬ人のあることなり。

〔語解〕さらずしもあらじ。人に物と問ふものは、全く さらずして問ふものにもあらずとなり○うららかに云々。人の問はゞ何とゐく靜かに云ひ聞すべしとなり○淺ましさなどばかりいひやりたれば。甚淺ましき故と云ひやらずして、淺ましき上のみ云遣りたればなり○とひにやる。何事のあるにやと、おさねてささの人より、我にとひに來るなりと句解に見ゆ○世にふりぬる事云々。世に流布して、世人ひきゝ驚したる事柄も、おのづから聞洩せる者あれば、明白に告げやりたらむは能き事なりとなり。

第二百三十五段

ぬしある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくる事おし。あるじなき所には、道行人、みだりにたち入り、狐ふくろうやうのものも、人げにせかれねば、所えがほにいりすみ、こだまなどいふ、けしからぬかたちもあらはるゝものおり。又鏡には、色かたちなき故に、萬の影、來りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虛空よくものをいる。我等がこゝろに、念々のほしきまゝに來りうかぶも、心といふものゝなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちに、若干のことは入りきたらざらまし。

〔語解〕ぬしある家には。主人の確乎としてある家にはにて、ぬしは我心にたとへ、家は其身にたとへたる心おり○すゞろなる人。無用の人はの意なり○人げにせかれねば。人げは人氣おり、人間に塞き止められねばなり○こだまなど。木靈などにて、妖怪き事となるものどもと云ふなり○鏡に色かたち云々。是れ心の虛明なゞる鏡にてたとへたるおり○虛空よくものといる。虛

空の虚無廣大にして、森羅萬象といるゝと、人の心の萬物とのこさず心得る事にたとへたるなりと、季吟翁はいへり○念々のほしきまゝに來りうかぶ。我心に來り浮ぶさまゞ〳〵の情念と云ふなり○心にぬしあらましかば云々。本心の主人よく内に守り居らば、いろ〳〵の情欲は、入り來るまじとなり。

〔文格〕 上にましかばと云ひて、下に何々ましと結ぶは、古格にも適ひたる用法なり。此の事詞の玉緒に委しく見ゆ。

第二百三十六段

丹波に、出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたくつくれり。をだのなにがしとかやしる所ありければ、秋の頃、聖海上人、其の外も人あまたさそひて、いざ給へ。出雲をがみに、かいもちひめさせんとて、ぐしもていきたるに、各をがみてゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子こまいぬ、そむきてうしろざまにたちたりければ、上人いみじく感じて、あなめでたや。此の獅子のたちやういとめづらし。ふかき故あらんと、涙ぐみて、いかに殿原、殊勝の事は、御覽じとがめぞや。無下なりといへば、各あやしみて、まことに他にこと也けり。都のつとにかたらんおどいふに、上人なほ床しがりて、おとなしく物さりぬべき顔したる、神官をよびて、此の御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らん。ちと承らばやと、いはれければ、その事に候ふ。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ふ事ありとて、さしよりてすゑなほしていにければ、上人の感涙いたづらにありにけり。

〔語解〕 大社。素盞烏尊の御孫、大己貴ノ神と祭れる神社なり○しだのなにがしとかや。志太の某が事と句解に見ゆ○聖海上人。此人の傳記不詳○いざ給へ。いざまゐり給へなり○かいもちひめさせん。かいもちは攪餅なり、ろれとめしあがらせんとなり○こまいぬ。高麗犬又は狛犬と書く○いおに殿原。同行の人々に、聖海上人のいへる詞なり○都のつとに云々。都へ歸り彼地の土産として語らむの義なり○さかなき云々。不祥又は不善とも書けり。爰は心なきいたづら事となす子供等となり○上人の感涙いたづらに云々。聖海上人の特勝として感涙せられたる事の徒に空しくなれりきとなり。

第二百三十七段

柳筥にすうるものは、たてざま、よこざま、物によるべきにや。帷物などは、たてざまにおきて、木のあはひより、紙ひねりを通してゆひつく。硯もたてざまに置きたる、筆ころばぎしてよしと、三條ノ大臣殿仰られき。勘解由小路の家の能書の人々は、かりにもたてざまにおかるゝ事おし。必ぞよてざまにするゑられ侍

りき。

〔語解〕柳筥。柳にて造りたる箱なり。硯、短冊、鞠、冠、又は追善法事などの時に經卷とするものとも云ふなり○三條右大臣殿　兼好時代の人なるべけれど、傳記詳ならず○勘解由小路。句解に、世尊寺なり。行成の子孫代々能書の家なりとあり。

第二百三十八段

御隨身、近友が自讃とて、七箇條書きとゞめたる事あり。皆馬藝、させる事おき事どもなり。其のためしを思ひて、自讃の事七あり。

〔語解〕自讃。我と其身とはむることと云ふ○自讃の事七あり。近友が自讃したることと思ひ起して、兼好もさせることなき自讃が、七箇條ありとなり。

一。人あまたつれて、花見ありきしに、最勝光院の邊にて、をのこの馬をはしらしむるを見て、今一度馬をはするものならば、馬たふれて落つべし。おぼし見給へとて、立ちとまりたるに、又馬をはす。とゞむる所にて、馬をひきたふして、乘る人、泥土の中にてころび入、其の詞のあやまらざる事を人みな感す。

〔語解〕最勝光院。法性寺建春門院の御願寺なり○はする。馳るなり○おぼし云々。暫時の間立ち留まりて見られよとなり。

一。當代、いまだ坊におはしましゝ頃、萬里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿、伺候し給ひし、御ざうし〳〵用ありて參りたりしに、論語の四五六の卷を、くりひろげ給ひて、唯今御所にて、紫の朱うばふことをにくむといふ文を、御覽せられたき事ありて、御本を御覽ぜれども、御覽じ出されぬなり。おほよくひき見よと仰せでとにて、求むるなりと仰せらるゝに、九の卷のそこ〳〵の程に侍ると申したりしかば、あゝうれしとて參らせ給ひき。かほどの事は、兒どもゝ常の事なれど、むかしの人は、いさゝかの事をも、いみしく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、袖とたもとゝ、一首のうちに、あしかりなんやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、「秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖と見ゆらん」と侍れば、何事かさぶらふべきと、申されたる事も、時にあたりて、本歌を覺悟す。道の冥加なり。高運なりなど、とと〳〵しくおかれ侍るなり。九條相國伊通公の欵狀にも、ことゝある事おき題目をも、かきのせて自讃せられたり。

〔語解〕當代。後醍醐天皇なり○坊におはしましゝ頃。春宮坊なり、いまだ皇太子にておはせし時となり○萬里小路殿御所。萬里小路なる御殿と、春宮の御所としておはせし事なり○御ざ

うし。御曹司と書く、局の名なり○紫の朱うばふことと云ふにて、似て非なる事と惡むとなり。論語陽貨篇曰惡二紫之奪一朱○九の卷。卽ち論語の陽貨篇なり○ゐはゞの事。これしきの事とゐり○秋の野の草のたもとの云々。この歌は、在原ノ棟梁が歌として古今集に見えたり。歌意は、秋の野に生ひたる草のたもとであるゐまあ。ゑゐるに花薄は穗に出でて人と招く袖と如何して見ゆるならむとなり○時にあたりて。勅問の時にあたりてなり○道の冥加なり。歌道の仕合せなりとの義なり○欵狀。禁中へ官位とのぞみ、或は訴訟と提起する時の申狀なり。字彙に、欵は誠なり、叩なりともあり。

一。常在光院の、つき鐘の銘は、在兼卿の草ゐり。行房朝臣、淸書して、いがたにうつさせんとせしに、奉行の入道、彼の草をとり出でて見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば、聲百里にきこゆと云ふ句あり。陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりかと申したりしを、よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なりとて、筆者の許へいひやりたるに、あやまり侍りけり。數行となほさるべしと返事侍りき。數行もいかゐるべきにか。もし數歩の心か。おぼつかゐし。

〔語解〕常在光院。相國寺の末寺にて、其の舊跡、東山にあり○在兼卿の草ゐり。在兼卿は、菅原正二位左大辨なり。この八下書したりとゐり○いがた。鑄形なり○見せ侍りしに。兼好に見せたりとなり○筆者の許へ。在兼卿へとなり○數行のいゐゐるべきにゐ。數行の行の字、陽、唐ノ韻にも、庚ノ韻にもあり、陽、唐ノ韻にては、つらなるとよめり。鐘の聲のつらゐるといふ事いゐならん。もしくは數歩の心にや。ゑゐらば唐ノ韻ゐり。故にふぼつゐなく不審なりと、兼好云ひやりたるなり。

〔文格〕數行もいゐなるべきにゐは、にゐゐらむの格ゐり。にやにも此の格多し。結び詞と係辭の下に含めたるなり。

一。人あまたともなひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂のうち、龍花院とかけるふるき額あり。佐理、行成のあひだ、うたがひありて、いまだ決せぎと申傳へたり。堂僧ことゞしく申侍りしを、行成ゐらば裏書あるべし。佐理ならばうらがきあるべからぎと、いひたりしに、裏は塵つもり、虫の巢にて、いぶせげゐるを、よくはきのでひて、各々見侍りしに、行成位署名字年號さだかにみえ侍しかば、人みな興にいる。

〔語解〕三塔巡禮。山門の西塔、東塔、横川これと三塔といふ。ろとゝがみめぐる事なり○佐理。正三位前ノ太宰大貳參議佐理卿なり○行成。正二位太宰權帥權大納言行成卿ゐり○いぶせげゐる。むさ〳〵として氣味わるく、見るもいみ〳〵しきさまなり○位署。姓名の上に官位と書き

連ぬると位署と云ふ。

一。那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふ事を忘れて、これやおぼえ給ふといひしを、所化みな覺えざりしに局の内より、是々にやといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

〔語解〕那蘭陀寺。上に見えたり○道眼ひじり。これも上にあり○八災。憂、苦、樂、尋、伺、出息、入息、これと八災と云ふこと、藏乘法數に見えたり○所化。弟子なり、師とは能化と云ふ○局の内より。談義と聽聞に來り集れる局なり○いみじく云々。道眼の甚しく感じたりとなり。

一。賢助僧正にともなひて、加持香水を見侍りしに、いまだはてぬ程に、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えぞ。法師どもを返して、もとめさするに、同じさまなる大衆おほくて、えもとめあはぞといひて、いと久しくて出でたりしを、あなわびし。それもとめて、おはせよといはれしに、かへり入りて、やがてぐして出でぬ。

〔語解〕賢助僧正。醍醐の三寶院の僧正なり○加持香水。加とは佛の三密なり。持とは行者の三業なり。彼の三密と此の三業に持たると加持と云ふなり。正月八日より十五日の朝まで、御

法事あると七日といふ。其間に三度の加持ありと句解に見ゆ○陣の外まで。ことと執り行ふ所と内陣と云ふ。其の外までなり○大衆。大勢の人と云ふ義なり○ぐして出でぬ。僧都と尋ねつれ出でたりとなり。

一。二月十五日、月あかき夜、うちふけて、千本の寺にまうでて、うしろより入りて、ひとり、かほふかくかくして聽聞し侍りしに、優なる女の姿にはひ、人よりてとおるがわけ入りて、膝にゐかゝれば、にはひなどもうつるばかりなれば、びんあしと思ひて、すりのきたるに、猶ゐよりておなじやうなれば、たちぬ。其の後ある御所ざまの、ふるき女房の、そゞろごといはれしついでに、無下に色なき人に、おはしけりと見おとし奉ることおんありし。情なしとうらみ奉る人おんあると、の給ひ出したるに、更にとそ心え侍らねと申してやみぬ。此の事、後にきゝ侍りしは、彼の聽聞の夜、御つぼねの内より、人の御覽じおりてさぶらふ女房を、つくりたてゝいだし給ひて、びんよくば、言葉など、かけんものぞ。其のありさま參りて申せ。興あらんとて、はかり給ひけるとぞ。

〔語解〕千本の寺。洛西の釋迦堂あり。二月十五日は遺教經の法事なるべし○膝にゐかゝれば。

兼好の膝によりゐゝればとゐり○びんゐし。たよりゐしゝとゐり○すりのき。兼好いぶせく思ひて側へすり退きたりとなり○ふるき女房。年老たる女房と云ふ○ろゞろごと。俗に云ふ戯言なり○無下に色なき人云々。彼の老女の兼好にいへるざれ詞ゐり○さぶらふ女房とつくりて。宮仕への女房とつくりたてゝ、わざと兼好の膝によりゐゝらしめたりとなり○びんよくば言葉などゐのけんものぞ。兼好大氣焰とはきて、便宜よくは言葉とゐげんと思ひたりと、戯れたる詞ゐり。

第二百三十九段

八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。此の宿、清明なるゆゑに、月をもてあそぶに、良夜とす。

〔語解〕婁宿なり。野槌に、東方七星、角。亢。氐。房。心。尾。箕。北方七星、斗。牛。女。虚。危。室。壁。西方七星、奎。婁。胃。昴。畢。觜。參。南方七星、井。鬼。柳。星。張。翼。軫。正月一日より十二月晦日まで、廿八宿を一星づゝ毎日にあてゝ、其日の宿とす。近代もろこしより來る暦には、廿八宿と次第して日數に配す。日本にては吉備公の相傳ゐりとて、別に前後まじはることゐり。中頃大内回祿せし日、牛宿なりとて牛宿と除ひて廿七宿とせり。今ゐんがふるに、八月十五、九月十三日は、婁宿なりといへるは、兼好、牛宿と除きたる義と用ひたるなり。八月、一角二亢三氐四房五心六尾七箕八斗九女十虚十一危十二室十三壁十四奎十五婁也。九月、一氐二房三心四尾五箕六斗七女八虚九危十室十一壁十二奎十三婁なり○清明。婁宿は西方の宿にして秋に屬し、秋は金に屬してもつはら清明なりとなり○良夜とす。野槌に八月十五夜と中秋として殊に月と賞翫するは、大低李唐の世より盛にゐりたる古例なりとぞとあり。

第二百四十段

ゑのぶの浦の、蜑のみるめも所せく、くらぶの山も、もる人ゑげからんに、わりなく通はん心の色こそ、淺からぬ、あはれと思ふふしぶしの、忘れがたきこともはからめ。おやはらからゆるして、ひたぶるにむかへすゑたらん、いとまばゆかりぬべし。

〔語解〕ゑのぶの浦、忍ぶといふ事を云はんために、岩代ノ國信夫郡の浦名とゐりたるゐり○蜑のみるめも所せく。所せくは、所せばき義なり。人と戀ひゑのぶに見るめゐりて、所せばきと云ふこゝろと、ゑのぶの浦といひるして、あまといひ、海草のみるめに見る事といひつゝけたるなり。新古今集に、打はへてくるしきものは人めのみゑのぶの浦のあまのたくなは」とあるに思ひ合はすべし○くらぶの守ももる人云々。くらぶ山は山城國にあり。暗部山と書く。暗き夜の通路と打忍びて立入らひとすると、守る人目の繁くゐらむにとなり○ゐりゐく云々。無理の義にて、さる所せき浦も守る人目繁き山も、事ともせず物とも思はず通はむとそるゐり○ふしぶしの。節々なり○おやはらゐから。父母兄弟ゐり。はらゐからは同胞の字と書く○ひたぶるに。一向になり

○いとまばものりぬべし。女とむのへて居えたちんには、おや兄弟よく云りて、最もはづのしのりなんとなり。

世にありわぶる女の、にげおき老法師、あやしのあづま人なりとも、にぎははしきにつきて、さそふ水あらばなどいふを、なか人、何方も、心にくきさまにいひなして、忘られぞ。忘らぬ人をむかへてもて來たらん、あいなさよ。何事をか、打いづることの葉にせん。年月のつらさをも、分けこしはやまのおども、あひかたらはんこそ、つきぜぬことのはにてもあらめ。

〔語解〕にげなき老法師。其の女に似合ぬ老法師とあり○あやしのあづま人。風俗のあやしげなる東の田舍人と云ふ義なり○さそふ水あらは古今集に文屋康秀が、三河ノ椽にありて下むとするとて、小野ノ小町がもとに、其の由云ひさそひける時に、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」とよめる歌の詞によれり。爰の意は彼の女と我妻にせんなど誘ふ者あらばとあり○あいなさよ。無愛の義なり○分けこしはやま。は山は端山にて外部入口の山なり。古今集の歌に、筑波山はやま忘げ山忘げけれども思ひ入るにはさはらざりけり」に思ひ合はすべし○つきせぬ云々。哀もつきせぬことのはにてあらむとあり。

すべて餘所の人の、とりまかなひたらん、うたて、心づきなき事おほかるべし。

よき女ならんにつけても、品くだり、見にくゝ、年もたけなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやはと、人も心おとりせられ、わが身はむかひゐたらんも、影はづかしくおぼえおん。いとこそあいなからめ。梅の花、かうばしき夜の朧月にたゝぞみ、みかきがはらの、露分けいでん、有明の空も、我身ざまにぞのぼるべくもあからん人は、たゞ色このまざらんには忘かし。

〔語解〕見にくゝ。醜さとあり○あたら身。惜き身あり○影はづかしく。我身のおも影はづかしきとなり○みかきがはら。大和の名所なり。御垣が原にて昔の內裏なりし跡なればかく云ふとぞ○我身ざまにぞのぼるべくも云々。梅の花のうばしき夜といふより、是迄は、通章の落着となるせるあり、我身のさまの、女より戀思はるべくもありぬ、美しき姿なのらん人は、色このまざらむ方よろしとあり。

第二百四十一段

望月のまどかなる事は、忘ばらくも住せぞ、やがてかけぬ。心とゞめぬ人は、一夜の中に、さまでかはるさまもみえぬにやあらん。病のおもるも、住する隙おくして、死期すでにちかし。されどもいまだ、病急ならぞ、死におもむかざるほど

は、常住平生の念に習ひて、生の中におはくの事を成じて、後、閑に道を修せんと思ふほどに、病をうけて死門にのぞむ時、所願一事も成せず。いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、此の度、もしたちなほりて、命をまたくせば、夜を日につぎて、此の事彼の事おこたらず、成じてんと願ひをおこすらめど、やがておもりぬれば、我にもあらず、とりみだしてはてぬ。此のたぐひのみこそあらめ。此の事まづ、人々急ぎこゝろにおくべし。

〔語解〕望月のまどのなることは。これ覺えずして死期の近づき來るにたとへたり○ゑばらくも住せず。須臾も止まらぬ義と知るべし○生のうちに。一生涯中にとゐり○われにもあらず。夢現わき難き程に、我身と忘却しての義なり○とりみだしてはてぬ。彼も是もまとまりが附のずして、一生と終りはて死ぬべしとなり○此事まづ云々。此の一大事を第一心に存して、造次顛沛にも忘るべからずとなり。

所願を成じて後、いとまありて道にむかはんとせば、所願つく可らず。如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて所願、皆妄想なり。所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもおすべからず。直に萬事を放下して、道にむかふとき、さはりなく、所作なくて、心身おがくゑづかなり。

〔語解〕道。佛道とさとなり○如幻の生の中。金剛經、曰如夢幻泡影。ゆめまぼろしの如き生涯と云ふ義なり○妄想。みだりなる物思なり妄念妄信と云はんも同じ○放下。なげすつる義なり○さはりなく。何の支障もなくとなり。

第二百四十二段

とてしなへに、違順につかはるゝ事はひとへに苦樂のためなり。樂といふはとのみ愛する事なり。これを求むることやむ時なし。樂欲する所、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝との譽なり。二には色欲。三には味なり。萬のねがひ、此の三にはなかるべし。是顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。もとめざらんにはなかるべし。

〔解語〕とてしなへ。長時の義にて、一生涯の間と云ふなり○違順。違は我心に違ふことにて苦なり。順は我心に順ふことにて樂なりと季吟翁は說へり○味なり。飲食の味なり○顛倒の想。この語、もと佛書に多し。さのさまに思ふ心にて、卽ち本心に背く義なり。法華經に、爲凡夫顛倒とあり。又常樂我淨の四顛倒と云ふこともあり。

第二百四十三段

八になりし年、父に問ひて云はく。佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父がいはく。佛には人のなりたるなりと、又問ふ。人は何として佛にはなり候ふやらんと、父また、佛のをしへによりてなるなりとこたふ。又とふ。をしへ候ひける佛をば、おにがをしへ候ひけると、又こたふ。それも又、さきの佛のをしへ

によりてなり給ふなりと、又とふ。其の教はじめ候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひけるといふとき、父、空よりやふりけん。土よりやわきけんといひてわらふ。問ひつめられて、えこたへずなり侍りつと、諸人にかたりて興じき。

〔語解〕八になりし時。兼好が八歳の時なり○父。卜部ノ兼顯をさすなり○佛には人のなりたるなりと。爰にて佛といふは、釋迦をさせるなり。釋迦は淨飯王の子、十九歳の時出家し、三十歳にして成道せしなり○佛のをしへによりて云々。釋迦は檀特山の阿羅々仙人の教によりて、成道したれば云ふなり。壽に、史紀孟嘗君傳曰文承間問「其父嬰」曰子之子爲「何曰爲」孫孫之孫爲「何曰爲」玄孫」々々之孫爲「何曰不」能」知也。此の文法を以て、此段を書けり。上の段には、人の願、おほしといへども、大略、名譽と色欲と飲食との三にすぎず。此の三のもの、本心の顚倒よりおこりて、かぎりなきさはりをなす。されば、此の三の願をやめて、佛道に入るべきことをいへり。此段には、三身壽量無邊經の意を以て、眞佛は外にあるにあらず、元來我が無心無念が本尊なる事をいへり。されば、人皆常住平生の念にならひ、違順苦樂につかはれて、本佛あることをしらず、本佛をさとり得て、道に入らん事は、萬事を放下して、世をのがれ、身心しづかにして在るべしと也。

文法註釋 **徒然草要義** 終

昭和八年十月十五日印刷
昭和八年十月二十日發行

文法註釋 徒然草要義

定價 金貳圓五拾錢

忠文館

共著 逸見仲三郎
神崎一作
發行者 松浦忠次
印刷者 岩岡忠一
製本者 三方宇太郎

發行所 大阪市浪速區元町二丁目十五番地
忠文館書店
電話戎五四六貳番
振替大阪貳貳壹壹九番

忠文館發行の新刊書

加納元著	秋田足穂著	吉井眞一著	夢想兵衛著	夢想兵衛著
趣味の傳說 **佛樣の新研究**	趣味の傳說 **神樣の新研究**	讀んで面白く修養になる **四十七士の逸話**	讀んで面白く修養になる **偉人の逸話**	讀んで面白く修養になる **烈婦の逸話**
四六判箱入 クロース表紙 三五六頁	四六判箱入 クロース表紙 三三〇頁	四六判箱入 上製 三九六頁	四六判箱入 上製 四五四頁	四六判箱入 上製 四六四頁
定價 壹圓五十錢 送一二	定價 壹圓五十錢 送一二	定價 壹圓五十錢 送一二	定價 壹圓五十錢 送一二	定價 壹圓五十錢 送一二

終